



これからの建築家を考える 商業建築と建築家

常任幹事会からの報告

城南地域会 城南散歩

杉並地域会 土曜学校

第33回 JIA 東京都学生卒業設計コンクール2024

覗いてみました他人の流儀

卒業設計をふりかえる

わたしの師

海外レポート

溶けた石 —鉄筋コンクリート建築の考古学— 第3回

Meaningful Garden —意味に満ちた庭— 第7回

弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第10回

温故知新

活動報告

学生の会@joint 活動報告

Bulletin

〈番外編〉交流委員会より

協力会員企業各社の特徴を知っていただくために

2017年からスタートした「パートナーズアイ」では、これまで29社の協力会員様にご登場いただきました。今号では改めてこのコーナーの趣旨と交流委員会についてお伝えします。

JIA 関東甲信越支部会員の皆様へ

JIAの法人協力会員として、ご協賛いただいている企業の皆様は、「本会の目的に賛同いただける法人」として、できる限りJIAの正会員等と対等な立場でご意見をいただき、一緒に当会を運営していくパートナーの位置づけであるべきと考えています。そのため、正会員に協力企業の特徴を知っていただく機会をつくることを目的に、「パートナーズアイ」の企画が始まりました。

それまでは、年会費はもちろんのこと、『Bulletin』への広告や建築家大会等への協賛のお願いなど、金銭面ではいつもご協力いただいてきました。しかし、実際の交流(商品に関する相談、会の運営に対する提案等)が活発であったとは言えません。一部の協力会員の方々は積極的に声をかけていただいていたのですが、全体的には少数であったと感じています。そこで、こちら(正会員等)から協力会員の皆様の会社を訪問

させていただき、声を直に聞いて他の会員にPRすることがひとつの交流の手段と考え、2017年の秋号より29社の方々を訪問してまいりました。

現在、関東甲信越支部には約140社の協力会員がいます。この企画が交流するうえでベストだとは思っていませんが、ここに来て、取材でお伺いさせていただける企業が少なくなってきました。新しい企画も含めて検討していきたいとは思っていますので、皆様ご協力お願いいたします。

他の会員の皆様も、「パートナーズアイ」のアーカイブがHPに掲載されていますので、時間があるときに一読いただき、協力会員の皆様への理解を深めていただければ幸いです。また、新しい企画等ご提案がありましたらご意見ください。よろしくお願いいたします。

交流委員会委員長 河野剛陽

関東甲信越支部「交流委員会」とは

交流委員会は関東甲信越支部の中にあり、正会員と法人協力会員が交流を図る核となっている委員会です。支部の正会員(建築家)と法人協力会員(建築生産に関わるメーカー、専門工事業者および関連業種など)が、共に良い建築をつくるパートナーとして、相互研鑽、技術や情報交流を図り、建築技術ならびに建築物の質の向上発展を目指すことを目的としています。



交流委員会の構成

正会員・専門会員等…………… 26名
 法人協力会員…………… 141社

主な活動内容

運営に必要な通常の会議や部会の他に、主な年間行事として、交流セミナー(正会員向けに幅広く研修を行うセミナー)、フレンズカップ(親睦ゴルフ大会)、交流大会(年度末に行う年間活動の締め)などを行うとともに、支部行事に積極的に参加しています。新型コロナウイルスの収束後も、引き続き「オンライン技術セミナー」を開催し、正会員の皆様がCPDを取得できる情報を配信しています。

法人協力会員

法人協力会員企業は職種によって7グループに編成されています。

- Aグループ 仮設、土木、杭、地盤調査、コンクリート、鉄筋、鉄骨
- Bグループ 防水、左官、塗料、吹付
- Cグループ 窯業・金属・石材などを中心とした外装材メーカー
- Dグループ 内装工事、内装材、家具、エクステリア材
- Eグループ 電気設備の施工会社/メーカー、搬送設備メーカー
- Fグループ 空調衛生設備工事会社、設備機器メーカー
- Gグループ CAD・情報処理、教育・出版

協力会員名簿や「教えて！協力会員」をご活用ください！

JIAではさまざまな分野のスペシャリストが協力会員になっています。商品について確認したいことなどがある時は、交流委員会のホームページにある「[協力会員名簿](#)」を利用して協力会員にぜひお問い合わせください。

同じような製品を扱っている会社が複数あり、どこに問い合わせればよいか迷う場合は、同じく交流委員会のホームページの「[教えて！協力会員](#)」が便利です。入力フォームより質問をすると、協力会員に一齐に配信され、回答可能な協力会員が答えてくれるシステムです。これにより、複数社から情報を入手することも簡単にできます。ぜひご活用ください。

教えて！協力会員 >
 さまざまな分野のスペシャリスト
 (協力会員) が質問に答えてくれます。

交流委員会HP >



< 交流委員会HPの
 こちらのページより

目次

● 特集

4 これからの建築家を考える
商業建築と建築家

- 4 商業に公共性を、公共に商業性を sinato 大野 力
- 6 自由が丘の「緑道の丘」 山崎健太郎デザインワークショップ 山崎健太郎
- 8 商業建築を考える 永山祐子建築設計 永山祐子

● ひろば

- 10 常任幹事会からの報告 2024年度第1回委員長・地域サミット合同会議、2024年度「新会員の集い」開催報告
山口設計事務所 山口 満
- 11 支部活動紹介 城南地域会 「都市河川」の河口を行く レジデンシャルデザイン 穴戸照二
- 12 杉並地域会 土曜学校16年の軌跡 Studio PRANA 林 美樹
- 14 学生デザイン実行委員会 第33回JIA東京都学生卒業設計コンクール2024 日本設計 木野内剛
- 16 覗いてみました他人の流儀 高橋正明氏に聞く 「よせもの」を広く伝える Bulletin編集WG
- 18 卒業設計をふりかえる 小さな希望をのせた舟 海法圭建築設計事務所 海法 圭
- 19 わたしの師 構造家としての姿勢を 一広い視野と創造をメッセージにー 山辺構造設計事務所 山辺豊彦
- 20 海外レポート 家族を連れて海外に移住するということ ーノルウェーでの暮らしー
Dipl.-Ing. Florian Kosche AS 中 太郎
- 22 溶けた石 ー鉄筋コンクリート建築の考古学ー 第3回
保存修復から生まれる革新 ーサン=ジャン・ド・モンマルトル教会ー 後藤武建築設計事務所 後藤 武
- 24 Meaningful Garden ～意味に満ちた庭～ 第7回 世界/窓/言葉 アイダアトリエ 会田友朗
- 25 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第10回
指定確認検査機関のミスに基づくトラブル 榎本・藤本・安藤総合法律事務所 安藤 亮
- 26 温故知新 先達に学ぶ プロポーザル方式を考える アーキテクトシップ 松岡拓公雄
- 27 抱負を語る 東京の灰色の空に槌音響く頃からのこと 戸室太一建築設計室 戸室太一
- 抱負を語る ルーツとこれから 雄設計室 古谷雄一
- 28 活動報告 交流委員会 Dグループ 建物見学会 ー2つのショールームを見学ー ウッドワン 鈴木孝治
- 29 交流委員会 Eグループ 納涼屋形船施設見学会開催 四電工 杼谷信孝
- 30 次世代のタマゴたち 古着屋さんから学ばせてもらったこと 日本大学 池田耕一郎
- 分人たちのいるところ 芝浦工業大学大学院 服部 和

● あとがき

- 31 ひといき 透明水彩画を描く テイクス設計事務所 武井貴志
- 2 パートナーズアイ 〈番外編〉交流委員会より 協会会員企業各社の特徴を知っていただくために

表紙写真：左 「tonarie大和高田」 設計 永山祐子建築設計（写真：Nobutada Omote）
中 “よせもの”の花火ろう付け作業
右 第33回JIA東京都学生卒業設計コンクール2024 最終審査風景

商業建築と建築家

商業に公共性を、公共に商業性を

sinato
大野 力



問題解決の飽和

VUCAの時代と言われて久しい。その社会背景の中で、商業やオフィス、ホテル、倉庫、工場など、さまざまな産業施設で変化が起こっている。社会やビジネス環境の複雑化と将来予測困難化に伴い、求められる機能や在り方が非定型化しているのだ。

例えば商業であれば、売るためだけの機能（売場面積・商品陳列量の最大化や効率性）は以前ほど重要ではなくなり、オフィスにおいても、ただ席数や会議室数を増やすためだけに投資を行う企業は少ないであろう。倉庫や工場でも、物流・生産性を高めるだけではなく、従業員のアメニティ向上や周辺地域との良好な関係構築に多くの工夫がなされている。

要は「量が足りないから増やす」とか「性能が低いから高める」とか、単純な問題のソリューションは飽和し、各プロジェクトに固有のアジェンダ設定が求められているのである。私はグッドデザイン賞で産業/商業建築の審査を担当しているが、自身の設計実務経験を超えて、多数の応募作品からもそういった変化の流れを感じている。

※ VUCA: Volatility (変動性) Uncertainty (不確実性) Complexity (複雑性)
Ambiguity (曖昧性) の頭文字を取った造語

新しい機能と形

新しい機能は新しい形を生み出すきっかけとなる。つまり今日の産業/商業建築の設計では、新たな図式や構成を発見し実装するチャンスが少なからずあるということだ。

また多くの産業/商業建築は、管理運営者以外の不特定/特定多数の生活者や従業員が使用するものであり、住宅のように施主＝使用者ではないため、VUCA時代にその「新しい機能と形」がプロジェクトにとって良いことなのか悪いことなのか、客観的に、あるいは過去の経験に基づいて正しく判断することは不可能であろう。つまり施主も設計者も平等に「分からない」のであり、その意味ではお互いの思想や未来の可能性についてフラッ

トに議論ができる。

そしてそのようなコミュニケーション下では「仮説の提示と見える化」が大変重要で、体良くまとまったテキストによるパワポ的な提案ではなく、具体的にビジュアライズされた「形」の提案がプロジェクトの大きな推進力になると感じている。そしてそれは、建築家の得意とする仕事ではないだろうか。

プログラムの拡張

参考事例として、私たちが設計したいくつかのプロジェクトを紹介したい。

[12 KANDA]

東京・神田に建つ、地下1階地上10階建てのシェア型複合施設である。

当初の与件は、全フロアを会員制のシェアオフィスにするものだったが、会員だけに閉じた施設にならぬよう、一般の人々が使える飲食店舗や時間貸しのシェアキッチン、また「小商いオフィス」と呼ぶ「小規模店舗やギャラリー等にも使えるオープンなオフィス区画」を低層部に配置することを提案した。

レンタル比向上(2以上の直通階段緩和)のために採用した屋外避難階段は、建物裏に追いやるのではなく、長手ファサード側に設置して日常動線化することで、街から小商いオフィスへの直接アクセスを確保すると同時に、2、3人用の小さなオフィスを含めた各室が街と直接対峙するような構成とした。また階段周囲の屋外通路を所々拡張しながら居場所化することで、ワーカーのさまざまな振る舞いがファサードに表出し、低層部の公共的なプログラム



「12 KANDA」ファサードの居場所

と混ざり合いながら、閉じた箱になりがちなオフィスというビルディングタイプを街に開くことを意識した。

【fruits peaks 仙台店/福島店】

仙台市南部の地区幹線道路沿い角地に建つ、果物とケーキの物販が併設された飲食店舗である。

多くのロードサイド店舗は、巨大な駐車場を道路側に配置し、建物はその奥に遠ざけられる。しかしここでは駐車場の前景化を避け、建物をなるべく道路側に配置し店内の営みを表示しながら、道路交差点側には「勝手に公開空地」を設けて、地域住民が自由に通り抜けや休憩ができるよう開放した。

福島店もほぼ同様の考え方で、道路交差点から敷地を斜めに貫通する公共的な歩行者通路を設け、敷地裏に広がる住宅街への「ショートカット動線」として開放した。テラス席で飲食をする客の目の前を、学校帰りの子どもたちや犬を散歩する地域住民が通り抜けるというわけだ。

店舗の体験に地域の公共的な振る舞いが重なったり、地域の生活に店舗の商業的な振る舞いが重なることは、双方の風景に奥行きと彩りを与えるのではないかと考えている。

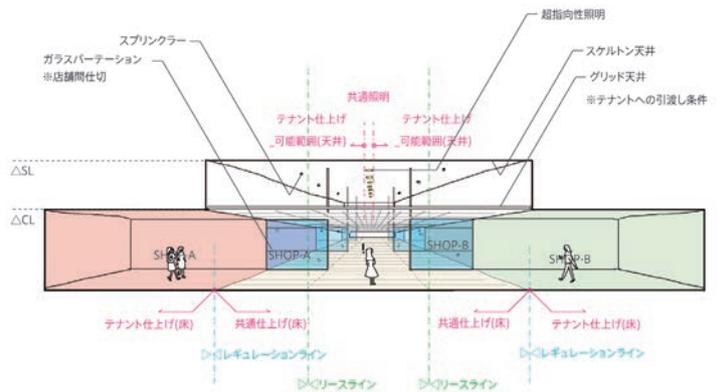
【NEWoMan 新宿】

JR新宿駅に直結する大型商業施設である。

ここで私たちが工夫したのは「共用部と専有部の境界を弱める」ということだ。具体的には全テナントへのデザインレギュレーションを作成し、高さや開口率の規制と共に、リースライン際の造作・仕上範囲を指定することで、賃貸契約上明確に決まっているはずの境界をズラしている。例えば専有部の床や天井を共用部に飛び出させたり、逆に共用部の床や天井を専有部に入り込ませたり、両者の設えが越境し領域がオーバーラップする状況をつくることで、境界を跨いだ一続きの風景が生まれている。

また多くのモール空間で見られる、多様で情報量の多い「商いのための専有部」と単調で情報量の少ない「交通のための共用部」という二項対立的な図式を避けるため、共用部に小さな居場所を多く設けながら「通路以上」の機能や造作・仕上量を与えることで、両者の視覚的差異を弱めた。

これらは、多種多様なテナントという他者性を内包しながらも纏まりのある全体をつくり、皆が繋がり共有する「ひとつの大きな場と営み」を可視化したものである。



「NEWoMan 新宿」 共用-専有部の概念図

公共性を帯びる商業空間

上記のプロジェクトに共通するのは、パブリックやcommonsといった、いわゆる経済合理性のようなものとはあまり馴染みのない概念をテコに、設計をドライブしている点である。シェアオフィスや飲食店舗にパブリックな機能や空間を引き込んだり、共用と専有の境界を弱め、テナントや各テナントに付随するコミュニティのcommonsを創出したり、もともとは施主やその用途が必要としていたわけではないプログラムを設定し、商業の新しい機能として扱っている。

もちろん全てのプロジェクトや事業者がそれに共感するわけではないだろう。また民間が整備する公共空間が、あまねく人々にとっての公共財にはなり得ないことも理解できる。しかしそれでも、さまざまなレイヤーで公共性を帯びた風景や居場所が選択肢として増えることは、社会にとって悪いことではないはずだ。

また一方で、行政による公共空間側も、商業の手法やロジックを取り込もうとする動きが顕著である。言うまでもなく、人口減少社会において税収だけでは維持管理が困難だからだ。つまり、商業と公共がお互いに近づき混ざり合っていく中で、その間を埋めるような場を設計していくことが重要なのではないだろうか。またそういった場の在り方が、双方の持続可能性を高めるようなエコシステムの生成が望まれる。



「fruits peaks 仙台店」 勝手に公開空地



「fruits peaks 福島店」 斜めの貫通通路



「NEWoMan 新宿」 共用-専有部の越境

自由が丘の「緑道の丘」

山崎健太郎デザインワークショップ
山崎健太郎



事業主は、国内外にショッピングモールの開発と運営を行うデベロッパーであり、この計画は初の都心型商業施設計画であった。当初、事業計画用に建築計画が策定されていたが、それは郊外型商業の形式であるインナーモールの考え方を基調とするもので、計画地は街に向かって閉じられ、かつ長大な建物でこの街にフィットするとは思えなかった。計画地は、自由が丘の商業地域と優良な住宅地の境界にあること、住宅地に対しては非常に大きな事業用地であることから、これまでの開発手法とは異なった計画アプローチが必要となった。そこで、これまでに築かれてきたインナーモールの形式から、自由に歩き回れるポーラス(多孔質)なアウターモールへと変換することで、建築のボリュームを抑え、街との連続性をもつ自由が丘らしい場所になることを目指した。モールそのものを目的として車で訪れる郊外型の施設とは異なる、自由が丘という街で過ごす多くの人々にとっての場所となるように計画をした。また人々の居場所や公共性といった、商業施設においてはこれまで積極的に考慮されてこなかった新たな価値を、屋外空間により余白を生み出すことで、場所の主体をハードから人に取り戻すことを試みている。



街との連続性をもつアウターモール形式の「緑道の丘」

都市型の複雑な法制限を収益化するデザイン

私たちの設計におけるチャレンジは2つある。1つは、都市型立地における商業施設形式の最適化である。商業施設である以上、収益面積は確保しながら、この街に相応しい姿を見つける必要があった。多くの人たちにとって、自由が丘のイメージは、緑道と個性ある路面店である。そこで初期計画においてインナーモールに充てられていた面積を外部空間に付け替え、それを連続させる

ことで通路や吹き抜けをまとまった豊かな外部空間へと変換した。加えて、避難階段を外部化することで平面的につなげた外部空間を上下方向にも連続させている。敷地における近隣商業地域と低層住居地域にまたがる立地から、大きな屋上空間が生まれ、さらに積極的に緑化規制や公開空地など都市型計画特有の法制限を「緑道の丘」という立体街路とすることで街と一体的な計画とした。もともと、車道と歩道が近接し、自由が丘というイメージからは想像できないほど歩くのに不向きな沿道であったから、歩行空間の安全性を高め、なおかつ「緑道の丘」をグランドレベルまで接続させ、アクセシビリティを高めることは商業施設計画の論理としても好都合だった。1階部分のインナーモールを除き、全てのテナントはこの緑道に面することになり、リースラインやサイン、照明計画なども緑道へのにじみ出しを促している。都市型の複雑な法規制を収益化できるデザインが、自由が丘にあるような路面店と街路の関係性を生み出していくことを目指した。



店舗が緑道へとにじみ出している2階プラザ

消費だけではない商業

もう1つは、地域の生態系やコミュニティへの貢献を通じて、消費だけではない商業施設にしていきたいと考えたことだ。緑道には武蔵野の在来種を選定し、来場者のためだけでなく等々力溪谷から洗足池への鳥の飛来ネットワークや多様な生物にとっても望ましい環境をつくろうとした。専門家とともに近隣に生息する鳥類と植生の調査を行い、鳥が好む環境を土地本来の植物で創るとともに、市街地という環境の中での水場不足を補



4階のテラスに設置されたデイベッドに寝転ぶと広い空を感じる



3階テラスでは「de aone TERRACE CLUB」というイベントが催され、地域コミュニティの醸成にも取り組んでいる

うべくバードバスを設置し、鳥の生息環境を高めた。また外装材として、ハンドスクラッチさせた保水性のあるせつ器質タイルを選定することで、緑地帯も含めて街の中でのクールスポットを実現している。外部空間には多摩産材ヒノキのウッドデッキを大面積で採用し、大きな商業資本を地域産業である林業の活性へとつなげている。そしてハードに加え、運営においては週末に「de aone TERRACE CLUB」というイベントを催すことで地域コミュニティの醸成に取り組んでいる。これらの試みを通



雨水はガーゴイルを介してバードバスに集水される

じ、大きな影響力のある事業主だからこそ、共感にもとづいた消費という潜在的な市場ニーズに対して、今後期待される新たな消費の姿を明確な形として表す「緑道の丘」を示してみたかった。

都市での「^{いかた}居方」を楽しむ

「居方」とは、「人間がある場所に居る様子や人の居る風景を扱う枠組み」として建築計画学者の鈴木毅先生の提唱している概念である。私はこの「居方」という考え方に会ったおかげで、ホスピス、デイサービスなど計画学的に進化の難しかったビルディングタイプの設計ができたと思っている。これらは、とてもシリアスな状況の利用者にとっての居場所の創出という観点から建築設計へと展開したものだが、居場所を失ってしまっている現代の都市生活者にとっても同様に言えることであった。例えば、私は以前パリの街を訪れたが、「居方」という見方によって、人と場所の関係がどれほど豊かであるかをはっきりと認識することができた。至る所で、人々は都市に身体を預け、「佇み」「居合わせ」「思い思い」に過

し、都市や他者と豊かな関係をつくっている。この計画において、施設自体の外部空間と施設の外に広がる都市空間を関係づけ、そこに佇む人々も含めて環境の一部であるかのような立体街路を思い描いていた。もちろんこれはすべて設計者がコントロールしきれるものではないが、さまざまな居方を促すきっかけはつくったつもりである。

オープンしてから1年が過ぎたが、緑道の丘を登っていくと、街を見降ろしているカップルや、デイベッドに寝転んで、空を眺めている親子に何度も出くわした。グランドレベルの交差点の傍らにあるベンチに女性が一人腰掛けて誰かを待っている姿もなかなか良かった。都市型商業の最適化や付加価値としての「街並み」もよいのだが、それ以上に都市生活者にとっての「街角」になっていることがうれしかった。丘の終点となっている何もない「はらっぱ」には、オープンしてまもなく蝶々やトンボがやってきた。買い物に全く興味のない子どもたちにとって、街で過ごした原風景となることにささやかながら設計者としての願いを込めた。この「緑道の丘」が、成熟した都市生活者を受容し、街と暮らすことの実感につながってくれたら、こんなにうれしいことはないと思っている。



ベンチは思い思いに過ごす人たちで溢れる

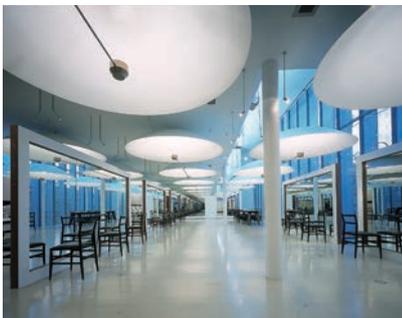
商業建築を考える

永山祐子建築設計
永山祐子



22年前独立してすぐに手掛けたのは表参道の大きな美容室「afloat-f」の内装だった。一度に30名の髪を切ることのできる、いわゆるその当時カリスマ美容師と言われていた美容師さんのいる巨大な美容室だった。独立まで在籍していた事務所、青木淳建築計画事務所では住宅、美術館の設計に携わった。一度だけ名古屋の「Louis Vuitton」のコンペに参加したが、勝利した後、私は担当ではなかったの近くで見ていたものの、実質商業建築を手がけるのはこの美容室が初めてであった。デビュー作が住宅だと住宅が続くと言われているように、この仕事を機に私のところには商業要素の強い仕事の話がくるようになった。独立して2年目に「Louis Vuitton」のファサードデザインのコンペの話がきた。そのように26歳で独立して20代後半は声をかけてもらった商業のインテリア、ファサードを必死に手がけていた。

時々、建築業界の人に言われるのは「永山さんは建築つくりませんか？」という言葉だった。その頃私は建築を経験の束と捉えるのなら、インテリアもファサードも建築という一連の経験の一部であり、建築を設計していくのと同じスタンスで設計を進めていけばいいのだというように自分の中で納得しながら設計を進めていたので、なんだかこの言葉を違和感を持って聞いていた。



「afloat-f」
(撮影：Daici Ano)



「LOUIS VUITTON
大丸京都店」
(撮影：Daici Ano)



「tonarie 大和高田」

(撮影：Nobutada Omote)

その後、奈良の大和高田駅前の大きなSC(ショッピングセンター)「tonarie 大和高田」の建て替えの設計に携わるようになった。もともとは駅側から見ても中が見えない巨大な箱状のSCであった。全天候型のインモールが地方では一般的ではあるが、駅周辺に公園が少ないこともあり立体公園をコンセプトにテラスを多く持つ、高齢者にとっても使いやすいインモールとアウトモールを合わせたような施設を目指した。

駅を降り立つと巨大なテラスがあり、駅前のペデストリアンデッキと繋がっているの自然に人々がテラスに集まりベンチに座る姿がオープン後、多く見られた。特にこのプロジェクトに関わってから地方において最も人が集まるのはSCのような商業施設であり、生活インフラでもある商業施設は公共建築よりも公共性の高い場であることを意識するようになった。

私たちが生活する街中で日々最も接するのは結局のところ商業建築である。街並みをつくる商業建築を設計することは都市を設計することにつながる。そこに建築家が関わるのは当然の使命のように思えた。でも大学の設計課題に商業施設の課題は出たことはなく、大抵は美術館、図書館などの公共建築であった。

私の卒業設計は日暮里駅であった。有料空間であるラチ内(駅構内)に日暮里駅周辺の要素、商業や墓地などが流れ込むような設計だった。線路を縦糸、横糸をその土地の持っている特徴ある要素と位置付け、1枚の布の



「JINS PARK 前橋」

(撮影：阿野太一+楠瀬友将)



「ソラトカゼト 西新井」

(撮影：高栄智史)

ような駅にさまざまな要素が混ざり合っていく風景を思い描いた。通過点だった場所が目的を持つ場所に変わっていくだろうと想像していた。その後、実際に「駅ナカ」という商業施設ができ、ラチ内空間が発展していく姿を見るたび、おこがましいが私の卒業設計を思い出した。思い返すとその時から商業には興味があったように思う。

地方の郊外型の店舗である「JINS PARK 前橋」、都内の駅前小規模商業施設である「ソラトカゼト 西新井」もそれぞれに土地性を読み解きながら設計していった商業施設である。

「JINS PARK 前橋」はメガネのJINSの郊外型店舗であった。基本的にJINSのお店は駅前商業的な買い回りが可能な商業施設の中にあることが多い。前橋の敷地はほぼ車で来ることを前提としたお店になるため滞在できるような要素を取り入れること、特に地域貢献型のお店としたいというクライアントの想いから毎日来れるようなパン屋さんを併設することを提案した。敷地の後ろ側に駐車場を借りて敷地内に駐車場をつくらずに建物の前を公園のように開けた場所にしたことで、さまざまなイベントを行うことのできる場所となり、公共的な要素を持った商業になったのではないかと思う。

一方の「ソラトカゼト 西新井」は近くの箱型の商業施設と対比させ、細長く接道する立地を生かして昔の軒を連ねた商店街のイメージのお店とした。小さな商業施設は潤沢なパブリックスペースをつくれな代わりに、道沿いの軒先空間なる場所をつくり、その空間だけはお店の界壁をガラスにすることで、まるで軒先が長く連なっているような連帯感のある空間とした。

それぞれの施設は今、賑わいを見せており、商業という起爆剤が街に賑わいをもたらしている。

前述のように大学で商業施設の課題が出なかったことをきっかけに、自分が受け持つ大学の設計製図では「商業的要素を持った開かれた建築」という課題を何年も出し続けている。敷地も規模も自由。商業+ α の用途を考えてもらう。物を買う行為そのものが多様になり、物を買うこと所有することへの欲が希薄な学生世代が商業建築をどう捉えているのかを知るためのリサーチにもなっている。今までさまざまなタイプの新しい提案が出てきた。銭湯を商業化した提案。宿坊をネットワーク化した宿泊施設。倉庫が店舗化し、配達ドローンが屋上から飛んでいく商業施設。ゴルフ場の跡地利用などなど。

私が建築家として世の中にデビューした時、同世代の建築家の多くが商業インテリアから仕事を始めていった。スキーマ建築計画の長坂常さん、元同僚でもある禿真哉さんと鈴野浩一さんのトラフ建築設計事務所、NAPの中村拓志さん。世間が建築家の考える商業インテリア、商業建築に可能性を持ち始めている、そんな機運を感じていた。

今の若い世代の建築家は当たり前のよう商業建築に関わっているように思う。商業の在り方も変わってきている。公共建築と商業建築が混ざり合ったようなプログラムも出てきていて、その線引きも曖昧になってきている。日常的に人を呼ぶ商業と公共空間の融合が良い相乗効果を生み出している。

一方、モノが売れない社会の中で商業の役割は変わってきていて、新しい場のアイデアを必要としている。街並みを形成する要素の中で最も多いプログラムである商業建築に建築家が積極的に関わることで、最終的に社会のあり方、街並み、都市を設計することに繋がっていくと思う。私はこれからも商業建築を通して社会と関わり続けたいと思っている。

2024年度第1回委員長・地域サミット合同会議 2024年度「新会員の集い」 開催報告



関東甲信越支部
常任幹事
(長野地域会幹事)
山口 満

やはり、実際に集まって話をして意見交換することは良いなと感じる会議・集いとなりました。

1. 会議・集いの概要

2024年7月29日(月)に、2024年度第1回委員長・地域サミット合同会議および、2024年度「新会員の集い」が、大山早嗣副支部長の司会で、以下のように行われました。

第1部 JIA活動のミッションとこれから

1. 支部組織構成、委員会・地域会規約について
2. 地域会活動・まちづくりの取り組みについて
3. 意見交換

第2部 JIA建築家大会2025千葉開催にむけて

1. 実行委員会報告
2. グループディスカッション
3. グループ報告と質疑応答

第3部 2024年度「新会員の集い」

1. 支部長挨拶
2. 概要の説明
3. 新会員プレゼンテーション

2. 第1部 JIA活動のミッションとこれから

渡邊大海支部長から、組織表・年間スケジュールの説明、定款・建築家憲章・倫理規定・行動規範(ガイドライン)の注目すべき点の説明がありました。また、委員会規約や地域会規約についても説明がありました。その後、6地域会と2委員会から活動報告がありました。

全活動報告を通して、①建築家協会・建築士会・建築士事務所協会の三会共同活動、②行政との共同活動、③市民参加活動があり、千葉で開催される来年度の全国大会へのヒントになるのではないかと渡邊支部長からの投げかけとともに、会員減少による今後の活動に関する意見などが交換されました。



委員長・地域サミット合同会議 渡邊支部長からの説明

3. 第2部 JIA建築家大会2025千葉開催にむけて

大会実行委員長である鈴木弘樹副支部長からの実施体制の説明の後、栗生明大会委員長より「建築の品格と優しさ」「身体で考える建築」という考えのもとに全国大会を考えているというお話がありました。その後、鈴木大会実行委員長と水越英一郎大会副実行委員長から、建築家大会2025千葉の概要や目指す姿の説明がありました。

さらに、参加者属性を考慮した5グループに分かれてグループディスカッションを行い、Q1：企画コンセプト案や公式テーマ案への疑問や改善点、Q2：大会をより良くするためのアイデア、Q3：協賛金・広告に関する良いアイデア、Q4：千葉以外の地域会の支援や対応可能な範囲、といった内容で話し合いがなされ、グループ報告と質疑応答によって、プログラム概要・大会規模の抑制・市民参加・建築家の存在を広く知ってもらうことなどの話題に関して活発に意見交換されました。

4. 第3部 2024年度「新会員の集い」

本年は、過去5年間(コロナ禍で中止した期間の2年間を含む)に入会した新会員のうちの6名が第1部から参加しました。各新会員に自己紹介プレゼンテーション(5分)を行ってもらい、各自の想いを話してもらいました。

5. おわりに

全てのプログラムを終えた後、会場の建築家会館ホールにあるバーでささやかな懇親会が開かれました。

建築家という職能でつながる50数名が一堂に会し、お互いの顔を見ながら意見を交わすことは、日本建築家協会が建築家のサロンであることを深く感じました。

栗生大会委員長は「建築家の誇りは、先取りして優しさ(品格)に気がついていること」と述べられていましたが、まさにこのようなサロンの場となりました。



建築家会館ホールのバーにて懇親会の一場面 栗生大会委員長、渡邊支部長、青木監査と新会員の皆さん

城南地域会

「都市河川」の河口に行く

—城南散歩 2024年7月20日開催—



城南地域会
大戸照二

城南地域会が開催する城南散歩、2023年、2024年のテーマは「都市河川」。城南地域を流れる目黒川・呑川などの「都市河川」沿いを歩き、まちづくり面からその課題などを考える機会となっています。この城南散歩の結果をもとに、年に一度「城南・ふれあいフォーラム」と称する講演会を開催しています。地域の区民を主対象に地元行政も参加し、区民・行政含めた意見交換の場となっています。

2023年の城南散歩は、「呑川中流域に行く」と「目黒川を巡る」。2024年の城南散歩は「立会川上流域の緑道に行く」と、今回報告する「都市河川の河口に行く」です。

城南散歩「都市河川の河口に行く」は水上タクシーを利用し、3隻に分乗し一般の区民含め23名が参加しました。ルートは、五反田のリバーステーションから目黒川をさかのぼり、目黒雅叙園近く太鼓橋通りで下流方向へ戻る。その後、目黒川河口、立会川河口近く、内川河口および呑川河口を巡り、羽田空港近くの天空橋リバーステーションへ至ります。主要スポットの概略説明を下記に述べます。

「都市河川の河口に行く」主要スポット

●大崎五反田地区と目黒川河口

再開発で、かつての工場街から大きく変貌した大崎・五反田地区では、親水施設「五反田ふれあい水辺広場」などが整備される。その下流、国道第一京浜付近から目黒川河道は直線状東方向に流れ、現河口は天王洲運河に至る。旧目黒川は蛇行し北上、現河口とは大きく位置が離れる。関東大震災時に海外からの救援物資を載せた大型船用埠頭がなかったことから埠頭整備の必要性とそれに伴う河川流路見直しの結果、昭和初めに現在の流路となった。

●旧目黒川河口ー品川浦と天王洲地区

旧目黒川河口ー品川浦は旧東海道品川宿に近接する。かつて「品川浦」は御菜肴おさいさかな（新鮮な魚を江戸城に納める）八ヶ浦の一つ、近くには旧南品川獺師町があった。現在は屋形船の船溜まりとなっており、水面近くに建物が建ち護岸も低く、かつての雰囲気を残す場所である。また近くに位置する天王洲地区は、もともとあった倉庫街が、

近年アート関連施設の街へと変わってきている注目の場所だ。

●内川河口および大森ふるさとの浜辺公園

内川は開渠部約1.5kmの河川。「大森ふるさとの浜辺公園」は内川河口部にあり、かつてこの地にあった砂浜や干潟を再現した施設。砂浜は泳ぐことはできないが、沖合はカヌー教室などに利用される。またこの地区沖合はかつて大規模な海苔養殖場があった場所で、河口近くに大森海苔の博物館がある。砂浜では海草の移植実験も行われている。

●呑川河口および旧呑川河口

旧呑川は内川に近く、かつては沖合の海苔養殖場への海苔船が河口近くに並び、また海苔の乾燥場となっていた場所。昭和初めに現在の直線の流路に変わり、海老取川へつながる。河口近くには現在多くの船が係留されている。

河口に行くクルーズの後、羽田空港イノベーションシティにおいて反省会を行い、最後に同施設屋上にあるテラスの足湯につかり発着する飛行機を見ながら歓談、今回の城南散歩を終了しました。

なお冒頭に触れました「城南・ふれあいフォーラム第12回」では「呑川の歴史に学ぶ」と題し、「都市河川」の歴史および河川の水質問題（今夏パリ五輪時セーヌ川で起きた合流式下水道を主因とする水質問題と同じ）・水害などについて、「第13回」では「都市河川の水辺空間を考える」と題し、都市河川の親水空間および緑地などについて議論を行いました。詳細については、城南地域会HPに掲載していますのでご覧ください。



城南地域会HP ▶



旧目黒川河口ー品川浦



天王洲地区

杉並地域会

土曜学校16年の軌跡



杉並地域会
土曜学校 第5代校長
林 美樹

2024年2月に開催した「下北沢から学ぶウォークブルシティ」で、JIA杉並土曜学校は通算61回となりました。16年間途切れることなく続けてこられたのは、地域会メンバーの熱意と抜群のチームワークの賜物と思っております。

初めての区外での開催でしたが、私鉄の地下化で生まれた土地をどうまちづくりに生かすかといった意欲的な取り組みは大変刺激になり、世田谷の関係者の方々との交流も持つことができ有意義な催しとなりました。

今年の夏に、第4代土曜学校校長の寺尾信子さんの起案で、土曜学校を振り返る会を開催いたしました。新旧メンバーやサポーターの方々が一堂に会し、スライドを見ながら記憶をたぐり、後半は歴代の地域会代表、土曜学校校長を囲んで、和やかで笑いの絶えない座談会となりました(写真1)。杉並地域会が設立された当時のこと、なぜ土曜学校を立ち上げたのか、土曜学校から何が得られたのか、そしてこれからの土曜学校に何を期待するかなどを会場の方々と共に語り合いました。

土曜学校のめざしたもの

杉並地域会は2003年の発足です。建築家の職能を追求するJIAが、本部だけでなく地域に根付いた活動を推進し始めた時期で、いち早く手を挙げたようです。杉並地域会の重鎮、曽根幸一さんは、本部で地域会を検討するワーキングの議長をされていたそうですが、コミュニティーアーキテクト、住民参加のまちづくりなどの気運が高まっていた時期と重なります。

私がJIAに入会したのは2005年で、堀正人さん、中村雅子さんと共に、「若手(金の卵?笑)」として大切にされ、

ベテランの方々と同じテーブルで膝を割って語り合ったことは忘れられません。その後、細分化していたWGを束ね、区民と共に学び考え行動する場としての「土曜学校」を林昭男が提案し、地域会メンバー全員でアイデアを出し合いながら企画・運営を担うことになったのです。

土曜学校が築いてきたもの

杉並地域会は、すでに杉並区主催の「コミュニティカレッジ」の企画運営などを受託していましたが、土曜学校は手始めに林昭男校長自ら関わっていた「杉並のエコスクール」をテーマに3回、杉並に由縁のある講師を招いて「地域を読む」を3回、計6回の座学としてスタートします。2年目は企画を私たち「若手」が任され、年間テーマを「地域をつくる」として5回、杉並在住の建築家、六角鬼丈さんのお話など、杉並の建築・まちづくりを読み解き、学ぶ講座としました。広報担当となった私が後輩の小倉壮平さんにチラシデザインをお願いしたところ、プロ顔負けの仕上がり。年間テーマの設定、各回の構成などを毎月の活動会議で話し合い、「土曜学校」は地域会活動の中心となりました。

2009年から2013年までは年間5回、2014年から2019年までは4回開催しましたが、その後別のイベントとして枝分かれする「建築家の本棚」や、杉並建築会(2013年設立)との共催イベント、アーバントリップなど、座学だけでなく、多様な企画が生まれました。それらは『土曜学校の記録』として3冊にまとめられています(写真2)。

年間テーマはいつも社会の最重要課題へと向かい、2015年、2016年は「空き家問題」、2020年、2021年は「with コロナ」、そしてここ3年は「カーボンニュートラル時代のま



写真1:座談会風景。左から利光収さん、寺尾信子さん、堀正人さん、林昭男初代校長、曽根幸一さん、篠田弘子さん、筆者、河野進さん、石井祐樹さん。40代から90代までと幅広い。中田久雄さん、遠藤勝勸さん、松枝雅子さんは残念ながら欠席



写真2:『JIA杉並地域会 土曜学校の記録』全3冊。2018年以降の4冊目刊行は未定

ちづくり」と続きます。コロナ禍においてはオンラインで開催し回数も減らすことになりましたが、逆に企画をしっかり練り上げて、2022年度は新区長の岸本聡子さんにご登壇いただき、下北沢での開催では、世田谷の保坂展人区長が会場で聴講され、コメントもいただきました。

土曜学校に期待すること

先の座談会で、聞き手の利光収さんが最後に「これからの土曜学校に期待することは？」と投げかけました。寺尾信子さんは「行政とのつながりをさらに発展させたい」、堀正人さんは「成果をもとめるもの、もとめないものがあってよい」、林昭男初代校長は「過去に蒔いた種を育てることが大切」、曾根幸一さんは「行政と仲良くしなさい」、河野進さんは「良い建築の評価を区民と共有する方法を探りたい」、石井祐樹さんは「対話しながら実践していく杉並スタイルを続けるべき」、とコメントされていました。私は「杉並には活発に活動している市民団体が多数あり、横の関係も築いていきたい」と答えました。

篠田弘子さんも堀さん同様「“土曜学校は成果を求めない、ゆるさが魅力”で、それこそが継続の秘訣」とおっしゃいました。ある一つの答えに集約させるのではなく、寛容に多様なものを受け入れて、次なる道を探っていくことこそが「土曜学校」らしさではないか、と。

会場に来てくださった本部理事の田口知子さん(港地域会)から、「活動が停滞気味な地域会が多くある中で、杉並は世代を越えたメンバーがフラットに活発に意見し合える貴重な地域会」と過分なお言葉を頂戴しました。おそらく立ち上げメンバーは、「役目・役割・業務」というようなものを型に嵌めず、仲間の個性を認めて自由に活動できるそんな場をつくってきたのだと思います。杉並地域会には年功序列もクォータ制もなく、老若男女、会員も会友も違いはありません。地域会ですから皆ご近所ですし、顔を見ればほっとして、会うのが楽しい、そんな仲間であり、建築・まちづくりのために力を尽くす同志でもあります。

土曜学校のキャッチフレーズに「共に学び、こころざす。土から始まる地域づくり」というものがありました。これは「土曜」と「土」を掛けた、ことば遊びでもありましたが、今思えば「土曜学校」は土づくりをしてきたのかもしれません。豊かで健全な土がなければ、種が飛んできて育ちませんし、鬱蒼とした樹木も生きながらえません。これからも、土曜学校は地道に「土づくり」に励み、新たな芽をしっかりと育てていきたいと思っています。

JIA杉並土曜学校の詳細はこちらからご覧いただけます▶



●JIA杉並地域会 土曜学校16年の軌跡（「建築家の本棚」2回を除く）

2008	・エコスクール化	・地域を読む
2009	・地域をつくる	
2010	・杉並からエコを考える	
2011	・地域をつなぐ	
2012	・杉並の未来を描く	
2013	・見直そう、身近かな暮らし	
2014	・暮らしを支える建築を巡る	
2015	・生きのこる街、杉並	
2016	・あれ？おや！こんな使い方！？	
2017	・成熟するまちと建築～使い続けるために～	
2018	・私の杉並、この一枚	
2019	・杉並らしい、未来のまちの姿を考える。	
2020	・杉並withコロナ時代のまち・いえ	
2021	・カーボンニュートラル時代のすぎなみのまちを描く	
2022	・カーボンニュートラル時代のすぎなみのまちを描く	
2023	・カーボンニュートラル時代のすぎなみのまちを描く	

学生デザイン実行委員会

第33回 JIA 東京都学生 卒業設計コンクール 2024



学生デザイン
実行委員会
木野内剛

JIA 東京都学生卒業設計コンクールの特徴

「JIA 東京都学生卒業設計コンクール事業」は、1992年度より毎年実施しており、本年で33回目を迎えます。2003年度からは審査を公開し、本年は5月11日(土)工学院大学 新宿キャンパス 1階アトリウムにて開催しました。翌日には、同じ会場で模型やドローイングの展示会も行われ、学生たちの創意工夫が広く公開されました。

4年半に及ぶコロナ禍の中、建築を学ぶ学生たちは対面での交流が大きく制限されました。しかし、対話を通じて得られる経験は、彼らの創造性を育む重要な糧となります。リアルな対話の場を提供することは、学生たちの学びや成長に欠かせない要素であると考えました。

このコンクールの審査方法は、対話を重視する点で他と差別化されます。特に1次審査では、出展者は5人の審査員それぞれに対して、合計5回のプレゼンテーションを行う機会を得ます。審査の場では、パネルに展示された図面や模型、映像などを駆使し、熱意を最大限にアピールすることが求められます。

創造のプロセス

藤本壮介審査員長の言葉を借りるとすれば、「審査会では、議論を通してさまざまな価値観が現れ、統合され、変化し、新しいものが生まれてくる、という創造のプロセスそのものが可視化されていた」と審査プロセスについてご講評をいただき、大変うれしく思います。

審査の過程では、審査員同士が建築教育に対するお互

いの考え方を尊重しつつ、率直かつ建設的な意見交換が行われました。作品群の魅力や価値は多角的な視点から評価されますが、審査の視点は、あらかじめ厳格に定められたものではなく、当日の審査員同士の白熱した議論の中での気づきの連鎖を経て、徐々に形成されていくものです。一次から三次審査(最終審査)と進む中で、暫定順位は目まぐるしく変動し、最終審査の終盤においてもなお、その結果の予測は難しく、最後まで出展者も運営委員や審査員も、その議論の行方に目が離せない刺激的な展開が続きました。

これからの建築と都市は、多様性を持った社会課題に対する具体的な建築的、都市的な提案が求められます。これらの社会課題は複雑かつ広範で深く、参加者は広がりを持った視点の中から、どの視点から課題を捉えるかによって、作品の評価が大きく異なることを実感することとなりました。このような審査プロセスは、参加者にとって非常に有意義な学びの場となったと思います。

今年度の入賞者によるトークセッション

●リラックスして話せる場所

昨年に引き続き、入賞者によるトークセッションを9月7日(土)に開催しました。当トークセッションはコロナ禍の2022年度に開始し、今年で3回目となります。コンクール後のフランクな対話の場を補うことを目的として、コンクール入賞者をパネラーとし、コンクール審査員をコメンテーターとしたトークイベントです。



審査会場全景



最終審査風景



トークセッションパネラーとコメンテーター

●第1部 自身の興味と社会の接続

トークセッションのテーマは、「卒業設計でめざしたこと、できたこと、できなかったこと」です。プログラムは第1部と第2部に分かれ、第1部ではパネラーたちが自らの体験を語る場となります。

まず、諸田華さんは、コロナ禍で1年次は学校に行かず、実家の静岡で過ごす中で「まち」に住んでいることを実感し、その感覚を他者と共有するための居場所を求めたことを話してくれました。次に、結城健仁さんは、提出の3週間前に卒業設計のテーマとなる清掃工場にたどり着き、「もう、やるしかない」と決意。24時間稼働している渋谷清掃工場へ深夜に電話でヒアリングを行い、短期スケジュールを乗り切ったという達成感が感じられるエピソードでした。杉原有香さんは、世界を正しく理解したいと考え、太陽系の惑星間の距離を正しく地図に表記することから始めたそうです。展示会に来た一般のお客さんに作品の感想や意見を聞きながら、自身の取り組みを再発見した彼女の姿勢には、探求心と柔軟性が見て取れます。最後に、竹原佑輔さんは、どんな人にとっても居心地の良い建築設計を目指し、一番身近な姉に真正面から向き合うことを決意したことを話してくれました。彼の言葉には、家族への深い愛情と建築への真摯な姿勢が感じられました。

●第2部 等身大の言葉

第2部では、パネラーとコメンテーターによるクロストークが繰り広げられます。ここでは、より深く自身と他者との向き合い方についての話が展開されました。言葉にできなかった得体のしれない「モヤモヤ」とは何か？自身の等身大の興味や社会課題を含めた他者との接続方法について、具体的に深く意見が交わされました。

設計のプロセスにおいて、自身と他者が向き合う中で、「普遍化するための言語」が本当に必要なのか？普遍化や一般化することで削ぎ落され、切り捨てられたものにこそ、唯一無二の深い価値があるのではないかという問いが投げかけられました。自分自身と社会を接続させる上で、自身の根っこにある等身大でリアルな感覚が大切である。今ある「建築家の言葉」ではなく、等身大の自身の感覚に近い言葉で自身の思いを語ることの重要性について、コメントが寄せられました。順位を決めなくて

はならない緊迫した審査会とは異なり、リラックスした雰囲気の中で、参加者たちは自由な対話を通じて新たな発見をし、互いの視点を尊重し合いながら、広がりや深みのあるクロストークが展開されました。

●心温まるメッセージ

トークセッションの最後に、コメンテーターから参加者に贈られた心温まるメッセージの一部をご紹介します。「無限に広がる社会課題をすべて解決することはできないのは当然のこと。目の前の身近なものにタックルし、深めていけば良いのだ」

「卒業設計とは、人生を通したリサーチプロジェクト。自身の探求することを理解するために、まずはデザインを試み、その結果を見て新たな発見をフィードバックすれば良い」

「卒業設計は成果ではなく、通過点であり、そこで終わりが来るものではない。実際の社会でも同じで、常に通過点を振り返り反省し、次への活動に向けた改善を続けることが重要」
「自身の美意識を発露させ、アウトプットに反映させることが大事だ。アウトプットは自己を肯定し、勇気づけてくれるものであり、愛着を持って取り組んでほしい」

「追い込まれると頭の中は訳が分からなくなる。しかしその時こそ、その人のすべてが出る。全力で取り組み、やり切った後は結果にとらわれず、さらに広がる世界を楽しんでほしい」



トークセッションの様子

社会に貢献する素晴らしい建築家

審査会場やトークセッションでの審査員やコメンテーターの一挙手一投足、その立ち振る舞いや学生に投げかけられる素朴な問い、優しい表情は、学生たちの心に深く刻まれるものです。一見、些細なことに見えるこれらの瞬間が、学生たちにとっては数年後、数十年後に大きな気づきとなり、「至極の記憶」として未来の素晴らしい建築家を支える大きな存在となる可能性を秘めています。

委員会は、そのような貴重な言葉や体験を、できる限り多くの学生が享受できるようこれからも努めてまいります。その場限りの知識や表面的な技術の習得にとどまらず、その素晴らしい経験を糧として、学生たちが将来、建築や都市の分野で独自の道を切り開き、社会に貢献する素晴らしい建築家に成長することを切に願っています。

高橋正明氏に聞く 「よせもの」を広く伝える



今回お話をうかがったのはジュエリーデザイナーの高橋正明さん。大学で建築を学び、フィンランドの巨匠建築家ユハ・レイヴィスカの事務所で働いた経験をもつ高橋さん。現在はアクセサリー工房を経営しながら、自身のジュエリーブランド「MASAAKI TAKAHASHI」を扱うショップの運営や、伝統技術「よせもの」を伝えるスクールも運営されています。

——ジュエリーデザイナーになる前は建築設計をされていたそうですね。まずはそこからお聞かせください。

中学生のときに夢見ていたのはファッションデザイナーでした。当時流行っていたDCブランドに憧れて、高校には行かずにニューヨークのデザイン学校に行きたかったのですが、父親に反対されました。高校を卒業する頃には海外に留学することの難しさも知って、文化服装学院に行きたいと思うようになりましたが、今度は大学に行くように言われて……。仲の良かった友人が建築学科に行くと言うので、何もわからないまま日本大学の建築学科に入り、だんだん建築にのめり込んでいきました。

日大には当時、「フジタ・都市講座」という海外から講師を招く講座がありました。僕が大学院1年の時には、マニエル・タルディッツとトム・ヘネガン、ユハ・レイヴィスカの3人が招かれていました。僕はそれには申し込まなかったのですが、先生に「お前英語できたよな。成田空港までユハ・レイヴィスカを迎えに行ってくれ」と言われて。ユハ・レイヴィスカのことは全く知らなかったのですが、高校時代にホームステイを経験したりして英語が少し話せたので、空港からホテルまでアテンドする仕事を任せられました。

成田エクスプレスの中でユハといろいろ話していたら、ワークショップに加わるように言われて、最後のパーティーのときには、フィンランド関係の方に「高橋くん、ユハ・レイヴィスカが君を事務所に受け入れてもいいと言ってるよ」と言われて驚きました。行きたいのだったら1週間以内に行くべきだとも言われて、すぐにポートフォリオをまとめてユハの事務所に行きました。それで、大学院を卒業してからフィンランドのユハの事務所で働くことになったのです。

——驚きの展開ですが、そこからどういうきっかけでジュエリーの仕事をするようになるのでしょうか。

ユハの事務所では、先輩スタッフのアシスタントとして図面を描いたりしていました。事務所内では英語でコミュニケーションを取っていたのですが、現場に行くと

職人さんたちはフィンランド語で話すのでコミュニケーションが取れないことがもどかしく、2年弱で日本に戻ることを決断しました。

日本に戻ってからはある設計事務所に就職したのですが、フィンランドでの仕事のリズムと全然違い、終電も当たり前で順応できずに2、3ヶ月で辞めて独立しました。それからは、両親が「よせもの」という手法でアクセサリーをつくる職人として工房を開いていたので、昼間はそこを手伝い、夜は住宅設計をするという生活になりました。

もともとうちの工房ではメジャーブランドなどの製品の製造を請け負う仕事メインだったのですが、あるときドレスメーカーの方に「よせもの職人」は高齢化で、若い職人は高橋さんくらいだと言われたんです。同様に「よせもの」を知るデザイナーも高齢化でブランドからいなくなってしまったら、仕事ごとなくなってしまう……。そして「よせもの」の良さをきちんと広く伝えられていないことに気がつきました。それで建築設計はいったんお休みして、「よせもの」を伝えることを考え始めました。

——「よせもの」とはどのような作り方なのですか。

今ほとんどのアクセサリーは、1つ原型をつくって、そこに金属を流して大量に製造するキャスト（ casting ）という作り方が一般的です。一方、「よせもの」は金属のパーツを寄せ集めて、そのパーツの接点をろう付けして作ります。そこにクリスタルを爪留めで付けるので、軽くて、パーツの透け感もあってキャストなどに比べると一段ときれいにキラキラ輝くのが特徴です。アクセサリーを作る技法はさまざまありますが、「よせもの」は結婚式のティアラやネックレス、舞台衣装など点数の少ないものに適した昔ながらの方法です。

——なかなか引き継ぐ人がいないのはなぜでしょう。

キャストの場合、粘土などで原型の形を自由に作ることができます。一方、「よせもの」は、クリスタルガラスは形やサイズが決まっていますから、例えば丸みを帯びたブーンドルを作るには、レゴブロックやドット絵のよう

に上手に抽象化してデザインしなくてはなりません。

それから作る技術にもハードルがあります。「よせもの」は全てろう付けという溶接で作ります。ガス溶接の1つなのですが、その技術がすごく難しく、接点のところだけうまく銀を溶かしてつなぎます。その技術習得に時間を要し、僕も1、2年かかりました。

それから、一子相伝という部分も受け継がれにくい要因だと思います。僕はもっと技術を学びたかったのですが、他の「よせもの」職人がどのように作っているか見てみたかったのですが、父に「技術はその人の資産だからそれを盗んではいけない」と言われました。横のつながりがないのです。だから跡継ぎがいなかったら消滅してしまうということも分かりました。

—「よせもの」の普及のために具体的にどのようなことをしているのでしょうか。

まず認知普及のために、2012年に自分がデザイナーを務めるブランド「MASAAKI TAKAHASHI」を立ち上げ、2014年にこのブランドの商品を扱うお店をオープンしました。今もメジャーブランドからの受注製造をしながら、自身のブランドを展開しています。そして、「よせもの」の継承と発展を目指して2024年にスタジオを作り、教室もスタートさせました。

「よせもの」の普及を職人自身も邪魔をしていると思っています。職人はデザイナーの描いた絵を比較的自由に自分が作りやすいように変えてしまうのです。僕はそれがすごく嫌で、建築だったら考えられないですね。僕はデザイン画をなるべく忠実に再現したり、絵の通りだとうまくいかない部分はデザイナーにアドバイスをするようにしています。舞台衣装などのコスチュームジュエリーはファッションビジネスなので、安くなるならデザイン画とはちがう作り方を選ぶのもわかりますが、本当は良い作り方なのに、「よせもの」を自分たちで悪いイメージにしてしまってきたのも事実です。それから、デザイナーも「よせもの」のことを十分理解していないから無理な注文をしてくることもあります。デザイナーにも作り方を知ってもらわなくてはいけないと思っています。

—スクールではどのようなことを教えているのでしょうか。

クラスがいくつかあり、ホビークラスには「よせもの」を趣味で楽しみたい方が通っています。また、すでにアクセサリ作家として活動する方が、新たな技術として「よせもの」を学びに来ている方もいます。本格的に学びたい方は、定期的に通うアルチザンクラスで作家や老後の趣味のために技術を磨く方も想像以上に多くいます。それから「よせもの」を広めるためには、すべての人



花火ろう付け作業 「よせもの」において重要なろう付け作業。接点を1か所ずつ銀ろうを溶かしながら溶接する



花火箱 「よせもの」は、身につけるアクセサリだけでなく、さまざまな用途で使用できる提案も行っている

が作り手になる必要はないと思っています。

スクールのディプロマクラスには、デザインクラスとブランディングクラスがあり、デザインクラスで「よせもの」を知った人は、就職したファッションブランド内の企画でほとんど知られていない「よせもの」を提案しデザインを実現できる可能性があります。

また、ブランディングクラスでは座学でブランドを持つための所作なども教えています。将来的には「よせもの」デザイナーとしてブランドを立ち上げていただき、デザインしたものを私の工房で製作サポートできる体制などもイメージしています。すでにデザイナーや作家として活躍している人にとっても、自分の引き出しに「よせもの」が入れば表現力が広がるのではないのでしょうか。このように「認知・教育・普及・発展」の仕組みを作ることが重要なことだと考えています。

2018年からは、巡り巡って文化服装学院のジュエリーデザイン科で講師として指導する機会をいただきました。入学したかった学校ですから、声を掛けていただいた時は嬉しかったです。

世界中、伝統技術の継承は難しいとよく聞きますが、職人だから作ることしかできないと言うのではなく、職人も自分の技術が途絶えないように何かしら行動を起こさないと技術の継承は難しいと思っています。これからも「よせもの」の文化をつくっていきたいです。

—伝統やしきたりを軽々と越えていく様が非常に痛快でした。貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー：2024年9月13日「ヨセモSTUDIO」にて
聞き手：関本竜太・渡辺猛・望月厚司・伊藤綾香（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

高橋正明（たかはし まさあき）

コスチュームジュエリー作家

1972年東京都生まれ。1997年日本大学大学院修士課程修了後、フィンランドの設計事務所Juha Leiviska, Vilhelm Helander Arkkitehdit SAFA勤務。1999年帰国後、デザイン事務所atelierM+設立と同時に家業のアクセサリ製造業を手伝う。2005年デザイン事務所と家業を併しatelier8一級建築士事務所設立。2012年コスチュームジュエリーブランドMASAAKI TAKAHASHI設立。2014年MASAAKI TAKAHASHI atelier shop開店。2018年～文化服装学院非常勤講師。2024年～「よせもの」デザインスクール | ヨセモSTUDIO 開校。

小さな希望をのせた舟



海法 圭

2004年 東京大学工学部建築学科卒業、2007年 同大学大学院工学系研究科建築学専攻修了

卒計ってなに？

僕の大学は3年から建築を学び始めるため、課題を2、3個経験したらもうピッカピカの4年生である。満を持して卒業設計に向き合う感覚はゼロで、あまりにマンをジさなすぎて卒計ってそもそも何……？とつい考え始めてしまう。建築は制約の芸術と言われるが、この表現は、例えばせんだいメディアテークの柱が当初の想定より太くなって現実化したときの、あのリアリズムと格闘（または懐柔）し抜いた末に生まれてくる、必然と芸術がナイマゼになった美しさを賞賛するための言葉である。決して過度のリアリズムやエビデンスリアリズムを肯定する言葉ではない。僕にとって卒業設計は、おとなたちが作り上げてきた懐柔すべきリアリズムの波を乗りこなしていくために、最初に形作る小さな希望を乗せた舟である。（と学生時代に思っていたわけではないが）

彼らにも居場所を

提出1ヵ月前に考えていた提案に疑問を感じ、ゼロからリスタートすることに。原宿をふらふらしていたら見つけた大きな空気を調べてみると、都が警察署（と留置場）の建設を計画中だが、地域住民等の賛同を得られず計画休止中の敷地だった。当時留置場や拘置所の不足が深刻であり、代用監獄、冤罪や厳しい行動規制など、多くの課題が問題視されていた。そこで敷地の現実の状況を引き受けた上で、推定無罪の被疑者が地域に受け入れられる建築を作ろうと考えた。移動できず何もできないことが最も辛いという留置者の言葉があり、彼らが少し移動できる空間を留置の機能性は担保しつつ実現しようと試みた。そんなふうになんとかやることが決まったのが2週間前。そこからは優秀なヘルパーが次々と繰り出してくる図面、模型、パースなどに「じゃあそれで」と1000回くらい言っていたら完成してた。

原宿で買い物を楽しむ人と留置者が、壁を境に表裏一体となる建築だった。その壁をどのくらい壊せるか、両者の共存は可能なのか。そんなことを考えながら設計していた。見返すともっといくらかでも良い設計ができたなと思うが、当時の小舟はそれ相応に小さかった。



卒業設計「彼らにも居場所を。」受賞：辰野賞・コンドル賞・原研哉賞・日本十選（日本一決定戦ベスト10）・建築学会展選出など



夕方のデルフト駅

卒業設計で受賞したコンドル賞のおかげで、修士1年の時にアムステルダムにあるSeARCHという設計事務所インターンに行った。

オランダのお店では会計するときに“Hi.”という挨拶から始まるので、なんだか前からの知り合いみたいになれた。そういう生活を続けて気づいたことの一つは、日々の生活で、僕たちは無数の運命とすれ違っているのに、でもそれについて何も知らない、ということだ。今すれ違ったあの人には、主人公として経験してきた時間と物語がある。17年前、夕方のデルフト駅でそんな当たり前のことに気づかされたときの風景は今でも覚えている。同時に、建築の提供する空間にはその運命のすれ違いや境遇の異なる人々の境界を取り除くような力があるのではないか、と思うようになっていった。

圧倒的な現実の前に

知人の建築家に教えてもらった、ガザの様子を伝えるインスタグラムをフォローしている。時差のせいと思いたいが、夜遅くなると僕のタイムラインの9割はガザの凄惨さを伝える動画や写真であふれてしまい、そのあまりの衝撃的な内容に鼓動が早まる。感じるのは圧倒的な無力感。できることと云ったら、例えばイスラエルの支援企業かどうかで飲食店を選んだりすることくらい。

ガザやウクライナで起こっていることは僕らの日常と地続きであることは、メディアの時代の小さな画面が手のひらで実感させてくれる。建築設計という営みを通して彼らにも居場所を作ることができるのだろうか。懐柔も格闘もできない圧倒的な現実の前に、いったいどれほどの舟が必要なのか、と自問自答する日々だ。

構造家としての姿勢を

—広い視野と創造をメッセージに—



山辺豊彦

1969年～1978年 青木繁研究室在籍

大学時代

昭和40年、大学に入学時の希望は、当然建築デザインを目指す一学生だった。授業が始まり、しばらく講義を聞いていくうちに、意匠の他に構造系の講義に興味を持つようになった。特に青木繁先生、川口衛先生の講義には最初から魅力を感じた。両先生の理路整然とした講義、説明、黒板への展開は明快で素晴らしく、今でも鮮明に覚えている。

青木ゼミの卒論はシェル模型作成とその実験による検証が多かったと記憶している。青木先生はゼミの卒論課題も含めると数え切れないほどのシェルの模型実験をされてきて、気づいたことが2点あると説明されていた。1つは「力は立体的に流れる」、2つ目は「支持境界での条件はピン、ローラー、固定という理想化されたものでなく、常に中間的な性格を持つと考えるのが自然である」と。このことはゼミ教育を受けた者として明確に憶えている。学生時代には理解できなかったが、実務経験を積むことで理解できた。

卒業後、構造設計者を目指したいと思い先生に相談したが、「構造設計事務所は、一生勤める所ではないよ」と言われ、「いつかは独立を目指す覚悟で努力しなさい」と助言されたことを覚えている。

青木繁研究室での設計活動

青木先生の事務所、青木繁研究室内での設計活動は、先輩との担当制がしかれていた。設計事務所によって多少違いはあると思うが、原則担当者は基本計画・基本設計(概算見積含)・実施設計・現場監理までを通して担当する。ここでの概算見積とは構造躯体量の算出で、コストスタディを行うことが重要であることを意味する。

各設計段階ごとに当然先生に報告し、意見等を求めるが、このように担当者が一通り前述の設計過程を経験すると、確実に担当者の成長が見られる。要は、当時の担当者は責任者でもあるような位置付けだったと思う。そのことが設計者としての成長を早めたとも言える。先生も言われていたが、「各過程で、いくつもの点で構造家として主体的に判断を下す必要に迫られるのが常である。責任ある判断は構造に関わる理論の修得や技術の蓄積に

支えられ、さらに工学的センスがあつてはじめて可能になる」と。工学的センスは難しいが、各過程での判断とそれを経験することの重要性を述べられていた。

先生と所員の個別ミーティングも何度かあり、入社時には「若い時はできることは何でも無茶苦茶にやりなさい」と言われた。また、「もの創り」という言葉も好んで使われていた。「もの創りの基礎は科学する心と創造への意欲に支えられている」とも……。入社して慣れてきた頃の個別ミーティングでは、「日常のマンネリ化に陥ることなく現実を打破し、新しい構造技術への挑戦を試みる勇氣と意欲を発揮することが、構造家としてなすべき構造設計をこの上なく楽しいものにしてくれる道に繋がるものだ」とも言われていた。日常的にそのようになりたいものだとも今でも自身に言い聞かせている。

独立と大工塾の活動

私は在籍9年を経て独立し、構造設計事務所を設立した。数年後に青木先生から大学の非常勤講師のお誘いを受け、昭和57年～平成9年まで15年間勤務した。同時期に大工塾の活動を始めた。試験体は塾生が製作する「目で見て、体験して、構造(力の流れ)を理解する」ことを目標とした。多くの実験を「体験」することで塾生の意識は確実に変わっていった。なお、ここで得られたデータ等は拙著『ヤマバの木構造』に収められている。

おわりに

青木先生は、これからの若い人たちに対して「構造の世界にのみ閉じこもることなく、建築そのものを広く理解し社会の動きをも敏感に捉えることのできる幅広い構造家を目指すべきである」と述べられていた。時代が変わっても構造設計の基本的な考え方は変わらないと思う。先人の作品や活動、言葉が、若い人たちの教訓として興味を持っていただけたら幸いである。



現場調査後に青木先生(右)に指導を受ける筆者(中央)

家族を連れて 海外に移住すること

—ノルウェーでの暮らし—



中 太郎

転職しノルウェーのオスロに移住してもうすぐ2年が経つ。恐れ多くも建築家向けの海外レポートなる記事の執筆を引き受けてしまったものの、正直に言って何を書いてよいのか分からない。これまでの2年間は日々の生活に手一杯で、ノルウェーの建築について人に語れるほどまだよく知らない。仕事についても日本との違いを感じつつも、それを言葉にするにはもう少し時間がかかる気がしている。私は建築家ではなく構造家なので、『Bulletin』読者の方が期待されるような話はそもそも書けない気もする。

そこで勝手ながら、建築というテーマに縛られず、ただただノルウェーでの日々の生活のことを書きたいと思う。建築を志す人の中には海外留学や海外就職を目指す方も多くおられると思うし、私も例に漏れず期待と不安に胸を膨らませながら日本を離れた。しかし、30歳を過ぎて家族を連れての海外移住は、良くも悪くも想像したものとは違った。そんな私自身の泥臭い体験から、海外での暮らしを感じていただけたら幸いである。

こどものはなし

私たちがオスロに移住したのは2023年の1月である。私も妻も東京出身で留学の経験はなく、まして当時は4歳と0歳の子ども二人を連れての移住であった。引越の大変さは言うまでもないので書かないが、小さい子どもがいると生活はどうしても子ども中心になる。

引越した当初からよく家族で街を散策したが、北欧の雪道は二人乗りの巨大なベビーカーを押して歩くには向かず、日が短くてすぐ暗くなるため散策の時間も限られる。子どもにとっては建築なんか見ても何も面白くないので、雪遊びをするために近所の公園にばかり行きたがる。街中の公園で無料でソリやスキーやスケートができるのは東京出身者には新鮮で楽しいが、たまの週末に同じ公園にばかり行っているのは行動範囲が広がらないし、雪遊びは疲れる。学生の時はバックパッカーをして、1日に何キロも歩いてたくさん建築を見て回ったことを思うと、建築好きにはもどかしい日々である。

そのうち子どもたちが保育園に通い始めたことで、ノ

ルウェーの文化が急速に我が家に流れ込んできた。アウトドアが盛んな国柄のためか知らないが、子どもたちは夏でも冬でも毎日元気に外で遊ばされる。緯度が高いせいか夏は日差しがとんでも強く、長男は熱中症で倒れた。一方、冬は気温-15°Cでも平気で外で遊び、遠足で森に出かけてヘラジカの足を拾ったりした。小さい子はベビーカーに装着された寝袋に入れられ、ベビーカーごと屋外に放置されて昼寝する。たまに次男のクラスの先生から「今日は寒かったから室内でお昼寝したよ」なんて言われるが、昨日だって-10°Cは下回っていただろう。

ノルウェーの現地保育園なので、当然ながら言語はノルウェー語である。子どもの言語習得は早いというが、ある日突然未知の言語環境に放り込まれたうちの子はそれなりに苦労した。5歳になった長男はすでに日本語が達者であり、ノルウェー語が話せないのがつらくて保育園に行きたくないと毎日泣いていた時期は、親として心を痛めたものである。が、通い始めて1年も経つと「もう日本語もノルウェー語も同じくらい喋れるよ」なんて



遠足に行った森で
ヘラジカの足を拾った長男

言い出して、私のノルウェー語の発音にダメ出しをするようになった。つまるところ、北欧の冬は日が短いので、大人も子どもも気持ちが沈みがちなのだ。ビタミンDを摂取しなければ。

ことばのはなし

ことばを学ぶことは文化を学ぶことだ。外国に移住したからには現地語の習得はとて重要だと思う。職場の公用語は英語だが、ノルウェー語の習得も強く奨励されており、個人的にもノルウェー語の勉強をがんばっている。

北欧の人々は流暢な英語を話せる人が多く、ノルウェー語が話せなくても大抵のことは英語で解決できるのだが、社外との打ち合わせはノルウェー語で行われる

ことも多い。私以外全員ノルウェー語が話せるような場で私だけのために英語を使ってもらうのは申し訳ないので、黙って議論に耳を傾けるが、分からない時は本当に何も分からない。プロジェクトの担当者としては大変不安である。不安なので一生懸命理解しようとするが、やっと単語は聞き取れても文として把握できないことが多くもどかしい。そして打ち合わせが終わると、日本語での打ち合わせの何倍も疲れている。それでも何とかやっていると、国が違ってもやっていることはそう変わらないということなのだろう。特に構造の原理はどこにいたって変わらないので、ユーロコードは大抵読めば理解はできる。

ノルウェーで暮らす外国人の割合は日本に比べるととても多く、特に同じスカンジナビアのスウェーデン人とデンマーク人はよく見かける。これらの国の言語は文法的にはとても近いが発音はかなり違うので、最近はノルウェー語の打ち合わせ中にスウェーデン人とデンマーク人を聞き分けられるようになってきた。ただ何を言っているかはやはり分からない。先に書いた保育園にもさまざまなバックグラウンドを持つ子どもが在籍しており、長男は友だちと母国の言葉を教え合っていたようだ。本人曰く、日本語、ノルウェー語、ドイツ語、英語、中国語、イタリア語、アラビア語が分かるらしい。

保育園や学校は親にとっても言語の学習に最適の環境と言えるだろう。仕事の打ち合わせ中にはなかなか気軽に発言できないので、私がノルウェー語を使うのはもっぱら、子どもの送り迎え時に会う先生や他の保護者との雑談である。長男がこの8月から小学校に上がったため、先日は学校の保護者会に出席してノルウェー語の話し合いに2時間参加してきた。調子が良かったので7割くらい分かった(気がする)。

しごとはなし

そろそろ仕事の話もしないといけないだろう。設計者の働き方の面で日本と大きく違うと思うのは、業務報酬が固定でないということだ。日本では建物の面積等に応じて業務報酬が契約時に確定されることがほとんどだと思うが、こちらでは労働単価と見込み業務料が契約書に記載され、日々の労働時間をプロジェクトごとに記録・集計してクライアントに送付することで、実際にかかった労働に対して報酬が支払われる。そのため、残業が多いと社内からも社外からも厳しく注意されるし、計画の変更や追加業務には皆慎重になっているように感じる。

また、家族を大切にしている意識がとても尊重され、保育園のお迎えがあるからと言って同僚が15時に帰っても誰も文句は言わないし、育休を取る男性も多く見かける。

現在担当しているプロジェクトは何かと聞かれたら、「バイキング船を動かす仕事」と答えている。ノルウェーにはバイキングの歴史があり、オスロにも1000年以上前につくられた木造のバイキング船を展示する博物館がある。そのオスロのバイキング船博物館は現在拡張工事のため休館中であり、私もこのプロジェクトに関わっている。建物の構造設計ではなく、バイキング船の保存担当としてである。バイキング船は既存棟から隣に新築される新棟に移設されることになっており、その運搬中および移設後の安全性の検討を担っているのだ。建物の構造設計とは勝手はかなり違うが、1000年前の文化財を扱うということで、エンジニアとしては大変やりがいのある仕事である。



休館中のバイキング船博物館
(2027年再オープン予定) (©DIFK)

この原稿でどれだけ伝わったかは分からないが、私も家族もノルウェーでの生活を大変気に入っている。私のことを知る人からは、日本ではあれだけ仕事に没頭していた人間が家族のことばかり書いてどうしたことかと思われるかもしれないが、たしかにノルウェーに来て自分の生活態度は変わったと感じる。単身だったら感じなかったであろう苦労や不満もたくさんあるが、家族のおかげでノルウェーの社会とより深く繋がることができ、それがここで暮らすモチベーションとなっているのだ。



スノヘッタ設計のオペラハウスと、その目の前の公共スケートリンク

中 太郎 (なかたろう)

Dipl.-Ing. Florian Kosche AS

2015 東京大学大学院農学生命科学研究科修士課程修了

2015-2018 山田憲明構造設計事務所

2018- 中構造設計主宰

2022 東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了

2023- Dipl.-Ing. Florian Kosche AS

保存修復から生まれる革新

—サン＝ジャン・ド・モンマルトル教会—



後藤 武

過去の中の未来

1855年のパリ万国博覧会ではJ.L.ランボーが鉄を編み込んだコンクリート製の小舟を出品したり、1867年にはジョセフ・モニエが鉄網コンクリートの植木鉢で特許を取ったりと、19世紀半ばすぎには小さな鉄筋コンクリート製品の開発が進んでいきました。建築の分野ではルイ＝オーギュスト・ボワローが、新進気鋭のコンクリート技師フランソワ・コワニエと手を組み、外壁をコンクリート、柱と屋根を鋳鉄でつくったフランス・ヴェシネのサント＝マルグリット教会を1865年に竣工させます。この建物で使われたコンクリートは、無筋でした。切石組積造でつくられたキリスト教会堂は、基本的に引っ張り力がかからないように作られてきたわけですから、鉄筋は必要ありませんでした。だからヴェシネのサント＝マルグリット教会は、これまでのキリスト教会堂の延長線上で、石をコンクリートに置き換えて設計されたわけです。

では、はじめて公共建築で鉄筋コンクリート建築が建設されたのはいつだったのでしょうか。諸説あるのですが、着工年を基準に考えるとそれは、1894年に工事が着工されたパリのモンマルトルに現存するサン＝ジャン・ド・モンマルトル教会だということになるでしょう。今回のこの連載の主演は、この建物です。これは、中世ゴシック建築の保存修復家であり、建築家であったアナトール・ド・ボドーによって設計されました。鉄筋コンクリートという時代を画するイノベーションが、中世ゴシック建築の保存修復家の手によって最初に生み出されたという事実は、現代からすると不思議な印象を与えるかもしれません。未来を切り開こうとするイノベーションと、過去に向き合う保存修復。正反対の時間のベクトルを持っているかのように感じられるイノベーションと保存修復。鉄筋コンクリートの誕生の現場では、実はこの2つが結びついていたのです。今回はこの結びつきを考察していきたいと思います。

中世ゴシック、古代ローマ、ビザンティン

パリの観光名所として知られるモンマルトルのサクレ・クルの足元にひっそりと佇んでいるサン＝ジャン・



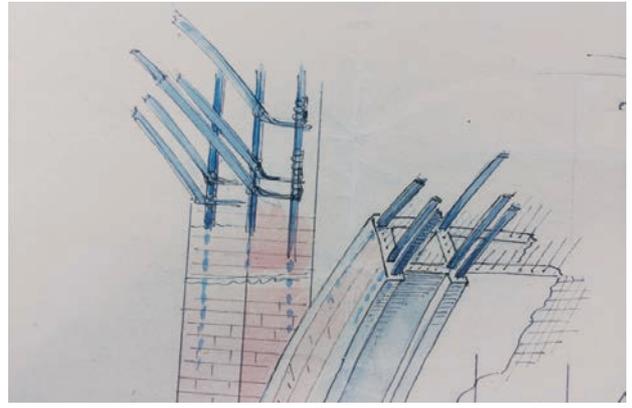
サン＝ジャン・ド・モンマルトル教会 外観
(撮影：後藤武)

ド・モンマルトル教会。煉瓦で覆われたその外壁を見ると、それが世界で最初の鉄筋コンクリートの建物であることに気づくことは難しいはず。建築家アンリ・ラブルーストに師事したあと、中世ゴシック建築の保存修復家であるヴィオレ＝ル＝デュクに学んだこの建物の設計者ド・ボドーは、保存修復の分野でキャリアを積み、師匠ヴィオレ＝ル＝デュクのあとを継いで、保存修復建築家としては最高峰の立場であるフランス歴史的記念物委員会の副総監に就任します。ド・ボドーはヴィオレ＝ル＝デュクとともに、中世ゴシック建築の構造原理が歴史上最も優れたものだと考えていました。

部材の役割分担を徹底し、歴史上例外的なほど細い柱やフライング・バットレスで荷重を支持できている中世ゴシック建築は、切石組積造であるにもかかわらず、まるで「やじろべえ」のように均衡のバランスをとって設計されているとド・ボドーは考えました。フランスの最も優れた中世ゴシック建築を引き継いで、19世紀に新しい建築を生み出すこと。この目標を掲げていたド・ボドーにとって、いくら中世ゴシック建築が優れているからといって、13世紀の建築をそのまま19世紀に再現させたとしても意味がないと考えていました。そこで彼は、中世ゴシック建築の課題を抽出します。石で重い屋根を架けると、外側に壁を倒していく推力が大きく発生します。その推力を支えるために、中世ゴシック建築はフライング・バットレスという外側からのつかえ棒の役割を果



サン＝ジャン・ド・モンマルトル教会 室内見上げ (撮影：後藤武)



サン＝ジャン・ド・モンマルトル教会、構法のディテール
MH26732, Ministère de la culture (France), Médiathèque de l'architecture et du patrimoine 所蔵

たす部材を発明しました。多くの保存修復の現場を経験してきたド・ボドーは、フライング・バットレスが崩壊している古い中世ゴシック建築の事例を数多く見てきました。そこで彼は、フライング・バットレスが中世ゴシック建築の最大の弱点だと考えました。このフライング・バットレスは室内からは見えません。建物にかかる推力が室内から目に見えないこともよくないことだと彼は考えていました。

さらに中世ゴシック建築には、屋根が二重に架けられています。内側には石で組んだ交叉リブ・ヴォールト。さらにその外側にはシャルパントと呼ばれる木の骨組みの屋根が覆っています。数年前にパリのノートル＝ダム大聖堂で焼け落ちたのがこのシャルパントでした。ド・ボドーによればこれは、雨の多いパリの気候に中世ゴシック建築がうまく対応できていなかったことの証拠でした。石造の屋根だけでは雨漏りしてしまうということです。フライング・バットレスが外側にあることと、屋根が二重になっていること。この2つの課題を克服していけば、中世ゴシック建築の構造原理を引き継ぎながら、新しい建築を生み出していくことができるとド・ボドーは考えました。その2つの課題を乗り越えるために、彼が参考にするべきだと考えたのが古代ローマ建築とビザンティン建築^(注1)でした。

古代ローマ人は、コンクリートという材料を発見しました。ヴェスヴィオ火山の噴火を目の当たりにした彼らは、火山灰に雨が降り注いで硬化している物質を見て、建築の材料に使うことを思いつきました。コンクリートを使って、彼らはドームの空間を発明しました。古代ギリシャ人たちが成し得なかった広大な空間を単一の永続する材料で覆うことを可能にしたのです。そのドームはとても重いものだったため、彼らは推力を支えるために分厚い壁をつくりました。コンスタンチノーブルにいたギリシャ人たちは、この古代ローマ人たちのコンクリート・ドーム技術を継承します。ただしギリシャ人らしく、コンクリート・ドームを軽量化して推力の負担を減ら

し、そのドームを壁だけでなく主に柱で支持するペンテンティヴ・ドームを開発しました。これには外側に突出するフライング・バットレスもありませんし、屋根も煉瓦とセメントで固められているために一重で施工されています。中世ゴシック建築よりも古い古代ローマ建築やビザンティン建築に遡って、中世ゴシック建築の課題を克服することができるとド・ボドーは考えました。彼は古代ローマ建築、ビザンティン建築、中世ゴシック建築のよいところを複合させて、19世紀の新しい建築を構想しました。その結果できたのが、サン＝ジャン・ド・モンマルトル教会だったのです。

サン＝ジャン・ド・モンマルトル教会

サン＝ジャン・ド・モンマルトル教会は、中空煉瓦の中に鉄のフラットバーを差し込み、鉄材とは別の煉瓦の空洞に粗骨材を入れないセメントを流し込んでできています。煉瓦を使用するのは、古代ローマやビザンティンの構法を引き継いでいるからです。軽量化を図るために粗骨材を入れないのは、ビザンティン建築の方法でした。外側のつかえ棒であるフライング・バットレスはなく、屋根も煉瓦とセメントで固めた一重になっています。世界で最初の公共建築の鉄筋コンクリート建築が、こうして出来上がりました。製鉄技術やセメント製造技術は、もちろん近代技術革新の産物ですが、しかしそれ以上に当時の建築家にとっては、歴史様式を乗り越えて新しい建築を生み出していくことこそが切実な問題でした。ド・ボドーにとってそのプロセスは、中世ゴシック建築を乗り越えるために古代ローマやビザンティンに遡ることによって可能になりました。過去を遡行することを通して見出された新しい革新。鉄筋コンクリート建築というイノベーションは、この過去と未来との捩れた関係の中に生まれたのでした。

〈注〉
1: 『鉄筋コンクリート建築の考古学—アナトール・ド・ボドーとその時代』後藤武、東京大学出版会、2020年

世界／窓／言葉



会田友朗

飛行機では年甲斐もなく、今でもできる限り窓側の席に座る。職業柄、関わる土地の様子をさまざまな角度から見たいのは当然だがそれだけではない。最低限の携行品と、狭くとも守られたひとときの自分の居場所。温かい機内食と少しのワインと、ヘッドフォンを耳に毛布を膝にかけて、自分だけの小さな窓からのぞくのは、雲のはるか下方をゆっくりと過ぎゆく凍てつく大陸の襲と山河、大都市や港湾の産業が彩る夜景。日常と非日常が極端なまでにないまぜになった不思議な体験がそこにある。

世界とつながる極小空間と窓

コロナ禍前。インバウンド需要が急増していた頃、ホステル(簡易宿所)の設計に携わる機会をいただくようになった。海外からのバックパッカーを主なターゲットにした宿泊業態で、バンクベッド(2段ベッド)の並ぶ大部屋(ドミトリー)がメイン。旅の疲れを癒す休息の場でありながら、同時に各国からの他のゲストや地元の人々との交流の場でもあるという点で、ホテルともカプセルホテルとも異なる。

そんな宿泊施設のベッドのデザインに、「飛行機の窓」は大きなヒントを与えてくれた。狭いバンクベッドでも窓を設ければ、朝起きて眠い目をこすりながら「自分専用」の窓から、温かい布団にくるまったまま異国の街の風景を眺めることができる、というわけである。こうして、海外含めて5つのホステルのバンクベッドや1人用のポッドをデザインしてきた。

2018年ヴェネツィアでは、ヨーロッパ文化センター(ECC)主催のTime Space Existence 2018展に参加、《Micro Interior Linked to the World》と題し、運河沿いのパラッツォの一室に、バンクベッドの実物をはじめ、映像・写真・テキスト等を半年間にわたり展示した。運河の見える窓に寄せて配置したベッドにはシーツや枕、スーツケース、洋服、本など旅行者の携行品が入った状態をリアルに再現し、展示期間中にいわば仮想的なホステルをヴェネツィアの街に現前させた。ベッドにはのぞき穴を設け、多くの観覧者が興味深そうに中をのぞき込んでいた。さあ、これからの海外展開を、というときに突如起こったパンデミックが悔やまれる。

空間に埋め込まれた言葉

ここで、2019年新宿にオープンしたホステルの個室にインストールしたアートワークについて紹介したい。従来型のホテルのアートによる空間演出とは異なり、その街の日常とのつながりを実感させる、とてもホステルらしい作品となった。ディレクターの和田信太郎との刺激的なディスカッションを経て、詩人のカニエ・ナハ、アーティストの青柳菜摘と中島あかねによる協働作品が完成した。

部屋番号5B、5C、5D、5Eという4部屋それぞれに、平面作品と詩が部屋に埋め込まれている。詩は、カニエ・ナハによる英語の詩で、たとえば、5Bの部屋はBではじまる旅にまつわる単語がモチーフ。青柳は、新宿の街を歩き採集した写真で画像を作り、中島が、詩と部屋にインスパイアされ平面作品として形を与えた。

詩は、部屋自体や旅行の体験、新宿の街を緩やかに想起させる言葉で、普段なら見過ごしてしまう、ドアの小口や窓ガラス、壁の一部、空間の端々に淡い色彩のカッティングシートで散りばめられている。カーテンを開けると新宿の都市風景を見晴らすバルコニーの手すりに「Cut the clouds into pieces and cast them on the rooftops (雲を粉々に切って、屋上に投げ投げよ)」という言葉を目にする、という具合だ。どんな瞬間に、旅人は部屋に埋め込まれた仕掛けに気づくだろうか？

この作品は、言葉の可能性と不可能性をシニカルに提示する、コンセプチュアル・アートを代表するジョセフ・コーススの作品、たとえば《FIVE WORDS IN FIVE COLORS》(1965)の影響も感じつつ、詩と実空間が共存することで見える世界の景色があるということを素直に感じさせてくれる。建築家だけではなし得ない、こうした協働の機会もまさに設計の醍醐味と言える。



Micro Interior Linked to the World (2018年、ヴェネツィアでの展示)



[UNPLAN Shinjuku] ドアの小口と壁にアートワークが施された一室

指定確認検査機関の ミスに基づくトラブル



榎本・藤本・安藤
総合法律事務所
弁護士
安藤 亮

皆様は、指定確認検査機関との間でトラブルになったというご経験はありますか？ 最近、私が相談を受けた案件の中で、指定確認検査機関が誤って建築確認を通し、完了検査の際に確認の内容が誤っていたとして減築を求められた、という例がありました。

かなりの大事ですが、このような場合、どのように対処すれば良かったのでしょうか？ 今回はこの点について検討していきたいと思います。

裁判で争われた例

まずは具体例として、東京地裁平成25年3月22日判決をご紹介します。この事件は、原告が、建物建築に際して設計監理業務を委託した被告設計会社に対し、建物の設計が区の第三種高度地区における斜線制限規定に違反しており、違法性がある設計を行ったとして債務不履行責任を追及。さらに、指定確認検査機関に対しても、違法な設計を見過ごしたとして、不法行為責任を追及しました（このほか区も被告となりましたが、割愛します）。

斜線制限規定違反に関する事実関係については、以下のとおりです。被告設計会社は、原告との間で締結した設計監理契約に基づき、建築基準法第56条第6項および同法施行令第132条・第134条に基づく「道路制限緩和措置」が北側の高度斜線制限に適用されると誤認し、これに基づいて設計を行い、そのまま建築確認申請が行われました。しかし、確認後に高度斜線制限に違反していることが判明し、原告は是正工事を余儀なくされました。

この違反が明らかになったのは、建築の途中段階で、建築確認を行った指定確認検査機関が全ての断面図・立面図を確認した際に、北側斜線制限に対する違反があることに気づいたことがきっかけでした。被告設計会社は、この違反の原因として、区の建築課が誤った緩和措置に関する情報を伝えたことが背景にあり、その誤った教示を信頼して設計したと主張しました。

本件における「道路制限緩和措置」の誤認は、建築設計における特定の法律・規制に対する誤解が原因となっています。通常、建築基準法第56条第6項や施行令第

132条・第134条には、建物の高さや斜線制限に関して、敷地が特定の条件を満たす場合にその規制を緩和する措置が定められています。この「緩和措置」は、道路に面する敷地の位置や条件に応じて適用され、例えば、道路の幅が広い場合には、一定の高さ制限や斜線制限が緩和されることがあります。

本件では、設計を担当した被告設計会社がこの「道路制限緩和措置」を誤って北側の高度斜線制限に適用できると解釈し、それに基づいて建築物の設計を行いました。被告設計会社は、区の建築課から得た情報を根拠にして、北側の高度斜線制限についても道路制限緩和措置が適用されると判断しました。しかしながら、北側の高度斜線制限には本来「道路制限緩和措置」は適用されず、道路側の斜線制限と北側の斜線制限は別個の規制であるため、これを緩和するための適用条件は異なります。区の建築課は、被告設計会社が主張するような誤った教示を行った事実を否定しており、被告側が独自に誤解して設計を進めた可能性が高いと判示されています。

結論として、判決では設計会社と指定確認検査機関の責任が肯定されました。

トラブルを避けるためには

私が相談を受けた事例も、上記裁判例も、指定確認検査機関が設計の誤りに気付かず確認を通してしまった点で共通しています。また、法の解釈について公共団体の建築課に問い合わせをしても、前提情報が不足していたり、そもそも正確に回答しようという姿勢がなかったりして、不正確な回答をされる可能性があります。

しかしながら、結果として法に反した設計をしてしまった場合、指定確認検査機関が共に責任を負うことはあつたとしても、設計者自身の責任が免れることはありません。このような事態を未然に防止するためには、そもそも指定確認検査機関等が判断を誤るということもあり得るといった認識を持ったうえで、法解釈や法適用について曖昧な点があつた場合、安易に公共団体や指定確認検査機関の意見を鵜呑みにせず、弁護士に相談するなどして、慎重に法解釈や法適用のリサーチをした上で設計すべきでしょう。

プロポーザル方式を考える



たけお
松岡拓公雄

私は滋賀県にて20年近く、多くの自治体の公共建築のプロポーザル方式やデザインコンペに関わってきた。中でも彦根市多賀町公民館のコンペは思い出深い経験である。なぜなら、コンペの企画、要項作成、実施までを役場と一体となって進め、成功した事例だからである。先行して町づくりの方向性、県指定文化財の多賀大社に代表される地元の主力産業の林業をベースに「木の町」というイメージを打ち出し、町を徐々に木質化していくことを提案した。町は新公民館建設検討委員会を立ち上げ、新公民館を木造第1号にしようと決定。ただ町役場はコンペ未体験で、滋賀県立大学の研究室において、地域貢献の良い先行事例になると考え、大学のCOC公募型地域課題に応募して資金を獲得、木質化研究とコンペ準備の費用にあてた。こうして公共建築のコンペを自分たちで立ち上げた。

一方で、この公民館のプログラムを大学の2回生の演習課題にし、講評会には建築学科の教員に加え、町長をはじめ担当者や検討委員会の方々を招待し、学生にプレゼンさせた。学生も緊張し、外部評価をもらうという教育との一石二鳥でとても効果があった。チームで20案くらい出たが、役場にも理解を深める刺激となった。小さい自治体ではなかなか内部ではコンペの企画ができない。ほとんどが全国展開するコンサルに案を発注し、入札で設計業者を決めてしまうが、コンサル提案書の中身は各地の焼き直しで思い入れもない。市民、町民の声も形だけで企画に新鮮さがない。コンペをすることが町づくりのきっかけとなり、また多賀を対外的にアピールするイベントにもなることを理解してもらい準備は進んだ。

プロポーザル方式は未だ多いが、自治体同士がマニュアル化した事例を元に調整し合い、参加資格実績要件や運営方式は同じで、結果的に登記しているランク付けされた大手や経験豊富な中堅以上の設計業者だけが参加できるという状況にある。対象建築の半分の面積以上の経験実績以上が必要だとか、担当者の経験とか、大体同じように参加資格が決まっている。若い人は全く参加できない。そこで、多賀のコンペは若い設計者にチャンス

をつくりたいと考え企画した。一級建築士で事務所をかまえてジャンルに限らず実践経験があれば、設計監理のプロセスは身につけているわけで資格ありとした。審査員には日本建築設計学会の協力を得て、会長の竹山聖氏、理事で構造の陶器浩一氏らを招聘し、他に地元の森林木材状況に詳しい方、公民館に精通した方、副町長など10名と、私が自ら立候補し審査委員長となり審査会を構成した。

170名以上の応募があった。蓋を開けてみるとブラインドで選ばれた5社はアトリエ系の錚々たる方々ばかりで驚いたが、選定されたのは新鮮なアイデアと目線レベルで町民の立場を把握した期待できる若手建築家だった。現地視察者や公開ヒアリング時には驚くほど大勢の方が訪れ、多賀の町が知れわたる良い機会になった。

根底にある町の木質化のイベントはこうしてスタートした。コンペ以後も設計各段階から完成まで審査員は見守る仕組みとし、またそれを建築教育の素材にした。今後のコンペのひとつの成功モデルにしたいと考えている。

現在のプロポーザル方式の提出物はすでにデザイン案に近いものがほとんどである。ばらまかれた評価基準点での合計は平均化され良い案も2位に転落する。従ってメリハリをつけた基準点の変更などの提案を毎回している。思うに、これからの建築家の立場や社会での役割、あるべき姿を考えると、民間のコンペはともかく、公共建築はもっと若い建築家にチャンスを与えるべきである。今、建築家の立ち位置もはっきりさせた方が良い。建築家は生き残れるのかと懐疑的である。特に日本では危うい。プロポーザル方式に加えて、デザインビルド方式も建築家主導型にすべきである。

JIAは各地域会でのコンペなど会員がかなり尽力しているが、本部として全国の自治体の建設計画の情報を集め、自治体に働きかけ公共建築コンペを増やし、そのアドバイスができるような体制をもっと建築家集団として自信をもってアピールすべきであろう。私は、公共建築のコンペを若い人が参加できるクリエイティブな仕組みに変えたいと思っている。

東京の灰色の空に槌音 響く頃からのこと



戸室太一

最近、気づいたことがある。私は高度成長の始まりの時期に東京渋谷区代々木に生まれたのだが、ある書物の中で公営住宅標準プラン51C型が初めて導入されたという「東京都営代々木山谷団地」の写真を見て、「これは住んでいた団地ではないか」と直感した。父は早稲田大学でドイツ語を教えていたが、この団地を借りた経緯を聞いていない。アルバム写真に残る51Cでの生活は親密だったと思う。近かった代々木オリンピックプールではしゃいだ記憶もあるが、その半面、カ〜ンカ〜ンと杭を打つ音が響く工事現場だらけの灰色の東京が私の原風景でもある。

幼稚園の中頃に千葉の習志野へ移って風景は一変した。空は青く、緑も豊かで、明るかった。大判雑誌に載っていた丹下さんの東京計画を見て、「わー、なんか凄い」と子どもながらも感じた。海上に連なる末広がり住棟の模型写真が今でも目に焼き付いている。近くにあった日大の学生が手に住宅の模型を持って歩いているのが羨ましくて、小学校の図工に家の模型を作ったりもした。そして私は建築の道を選んだ。

大学卒業後は小さな設計事務所へと向かった。早川邦彦さん、レンゾ・ピアノ、岡部憲明さん、アルヴァロ・シザ、谷口吉生さんの事務所にお世話になり、小さなものから巨大な建物までの設計、監理を経験した。幼い頃からゲルマンの世界を教え込まれてきたが、私はラテンの建物に魅かれポルトガルで数年を過ごした。大型のプロジェクトに関わったため、通常より10年ほど遅れてやっと独立することができた。現在は中規模の建物の設計が多い。これも今まで多くの方々との繋がってきたおかげである。JIAに参加させていただけたことで、新たな繋がりが広がっていくと期待している。



明福寺 書院・庫裏
(写真：奥隅圭之)

ルーツとこれから



古谷雄一

ルーツ/私の師匠

2024年9月8日私が師事した渡辺武信さんが享年86歳にてお亡くなりになりました。建築を分かりやすい文章で表現した建築家、そして詩人であり映画評論家でした。特に住まう人の心理的な居心地の良さを大事にされ、今でも私が設計する際のベンチマークになっています。心より御冥福をお祈りします。

これから/建築設計界を変えていくためにfrom神奈川

神奈川県には、(一社)神奈川県建築士会、(一社)神奈川県建築士事務所協会と(公社)日本建築家協会関東甲信越支部神奈川地域会の3会で構成する神奈川県建築会議という会議体があります。2006年から情報交換等を目的に集まり、2010年からは正式な会議体として、その時代の共通する課題について意見交換をしてきましたが、今年度からは下記テーマを主に検討し、結果を3会で実行・発信していくことになりました。

- テーマ1) 3会で共有する上位の概念について
- テーマ2) 資格制度について
- テーマ3) 建築設計界の将来を考える
- テーマ4) 災害対応について
- テーマ5) 講習会・講演会の情報共有、共催等について

背景には、設計事務所に所属する20〜30代の建築士が全国で1.5万人しかいない現状に対する危機感があります。次世代の担い手が我々の設計業界に入っていない理由はいくつもあると思いますが、建築設計界が一丸となってその根本的な課題に取り組まないと解決しない時期にきているようです。解決に向けて真剣に取り組む、少しでも建築設計界のお役に立ちたいと考えています。



渡辺武信設計室時代に担当した池田山の家
しゃもじ型プラン、切妻屋根、シャモット二丁掛タイル、天井高さ2250mm、開口は天井まで…がアイコンでした。

交流委員会 Dグループ

建物見学会

—2つのショールームを見学—



交流委員会
Dグループ
ウッドワン
鈴木孝治

6月11日に私たち交流委員会Dグループは、新宿パークタワーの「リビングデザインセンター OZONE」6階にある朝日ウッドテック(株)と(株)ウッドワンのショールーム見学会、および毎月の定例会を実施しました。

朝日ウッドテック(株)ショールーム見学

まずはセミナー形式で、朝日ウッドテックの歴史や物づくりの考え方、今後の国内の林業の利用価値や問題について勉強しました。朝日ウッドテックは銘木業を起源に、1913年の創業以来100年にわたり「銘木の素材の力を引き出すこと」を受け継いでいます。「木」の可能性を最大限に引き出し、人々の暮らしに「革新的な価値」を提供するという思いが伝わる説明に、皆が真剣に耳を傾けていました。朝日ウッドテックは、現在は床材(フローリング材)をメインに、壁・天井材、階段・手摺、カウンターなどを製造販売しているメーカーです。天然木を使用した、無垢材ならではの自然な風合いを感じられる商品も取り扱っています。

(株)ウッドワンショールーム見学

当社のショールーム見学では、まずはニュージーランドにおける取り組みから、CO2固定化による環境への貢献についてお話をさせていただきました。1990年に森林経営権を取得して、30年サイクルで法正林施業を行い、ラジアータパインを植えて、育てる、利用する、そしてまた植えるという循環型の森林経営を行っています。ウッドワンの森は計画的に再生林を行うことで環境にやさしく、二酸化炭素を吸収し、お客様に採用いただくこ



朝日ウッドテックのショールームを見学

とによって固定化されます。ラジアータパインで、無垢の床材、ドア、キッチン、構造用LVL(単板積層材)JWOOD(以下、LVL材)などを製造しています。

昨今、非住宅木造建築が増えている中、構造材の販売から構造設計サポートも増えてきています。材料メーカーの観点から最適工法を選定して、設計事務所様や施工業者様などのお役に立てればと考えています。鉄骨造でなくても高強度で強度のバラツキの少ないLVL材を使用したJWOOD工法なら、木造建築が実現ができます。木造で建築をつくることは未来の地球環境のために今できることです。

2社に共通することは「木」に特化した会社であること。地球環境の変化や人の豊かさの持続のため、サステナブルな社会実現のため、「鉄」から「木」への取り組みが評価されています。今回初めて2社の取り組みを説明させていただき、皆様に熱心に聞いていただきました。まだショールームにお越しになっていない会員の皆様にもご覧いただけたら幸いです。

one's artは、アート(個性)の可能性

最後に1つご紹介します。ウッドワンでは、障害がある方のアート活動を応援する「one's art」というプロジェクトを始めました。

「アートのチカラで世界をあたらしく、発見する。」

「one's art」は、アート(個性)の可能性を信じています。ひとりひとりがアートを通じてのびのびと才能を発揮し、広い世界とつながっていく。その実現をめざして始まったプロジェクトです。



見学会参加者

交流委員会 Eグループ

納涼屋形船施設見学会開催



交流委員会
Eグループ
四電工
とちぎに
杉谷信孝

私ども交流委員会Eグループは、電気設備業者および照明や弱電、電気機器メーカーで構成されており、正会員の方々と会議やイベントを通じて交流を重ねています。

特に昨今の建設業界は大型再開発を筆頭に建設ラッシュが続き、人手不足や物価上昇など、さまざまな環境の変化に対応すべく、Eグループ内でも情報交換を通じ、各社対策を講じているところです。

Eグループ活動報告の前に皆様にご報告がございます。

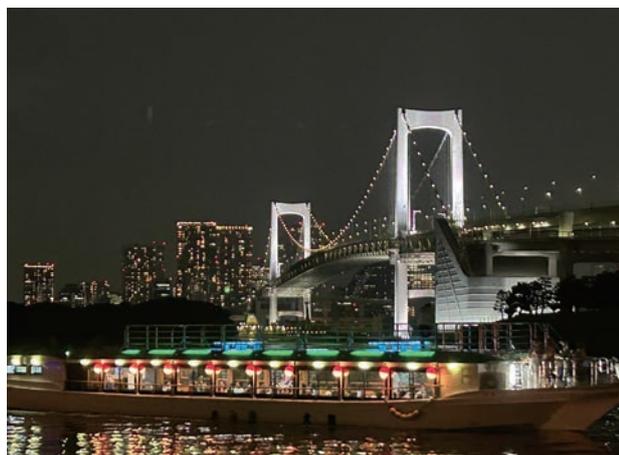
永年、JIAの活動に尽力いただいた個人協力会員の重岡公二様(ケイエスシステム研究所)が、7月2日(火)にご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

重岡様はパナソニック防災システムズの元社長で、当時Eグループ代表幹事も歴任されました。Eグループの重鎮として温かい目で見守っていただき、最後にお会いしたのは昨年末の忘年会で、自身の余命を堂々とおっしゃる姿に胸を打たれましたが、勇壮な姿に本当は病気ではないのではと思うほどでした。今、Eグループ全員寂しい気持ちですが、遺志を引き継ぎ活動していく所存です。

本題に入りますが、Eグループの活動は、7月の納涼屋形船での施設見学会と、年末のグループ会議後の忘年会が毎年の恒例行事となっています。今年は東京湾で月明かりの下、渡邊大海支部長にもご参加いただき、屋形船の船上から見渡せる高層ビル群や大型施設のライトアップを鑑賞しながら、時代の移り変わりを肌で感じ、多くの意見や考えを出し合える場となりました。また、東京湾から眺める景色には至る所でタワークレーンが建ち、建設業の需要の旺盛さを改めて実感する良い機会ともなりました。

そして並行して行われた懇親会では料理に舌鼓をうちながら、お酒の力も加わり大いに盛り上がりました。プレゼント交換ではその盛り上がりが高潮に達し、楽しく貴重な時間となりました。下船後、記念撮影が終わり解散となった後の二次会については、話せば長くなりますので皆様の想像にお任せします。

最後に、今回紹介した納涼船での施設見学会も重岡様が代表幹事時代に企画した行事であり、毎年恒例行事として続いています。今後もEグループの交流の場として続けていきますので、重岡さん、天国で見守ってくださいねー。



納涼屋形船での施設見学会



船上でスカイツリーをバックに記念撮影

今号は、学生会員個人の活動を紹介する「次世代のタマゴたち」を2名分お届けします。

次世代のタマゴたち



古着屋さんから学ばせてもらったこと

学生の会 @joint 池田耕一郎
日本大学理工学部建築学科 3年

ここ数年、第二次古着屋ブームが到来しています。店舗が全国的に広まったのとSNSによる拡散が相まって、1990年代の第一次より遥かに熱が高まっています。もちろん私も古着を愛用しており、趣味といえますか、行きつけの個人店で服についていろいろ教えてもらうことにハマっています。

最近、その店の店主と話した「単品の価値」というものが私の建築に対する視野を広げてくれました。古着は一品物です。誰かが一度袖を通して使用した痕跡が、色落ちやアタリ、破損など1つとして同じものはない一品物となります。その店の店主が言うに、その唯一無二が個人の独自性を表現するものとなるから古着は根強い人気がある。他人からの評価は関係なくて、お客さんはそれぞれに好きな服を身に纏って、自分の生活を豊かにしている。大量生産

され消費される社会で、単品・一品が生活を豊かにできる。個人が埋もれてしまいがちな社会において、自分の唯一性を高めたい人に専門家は、幅広い知識を使って提供し生活を豊かにすることが役割であると気づかせてくれました。

古着の枠を拡大してみれば、例えば、帽子、眼鏡、衣服の生地・形、アクセサリ、靴といった身につけるものに関するこだわりは人それぞれあり、デザイナーの奇想天外なオリジナルな作品が一部の人を豊かにしていることは確かです。これが、衣服と密接につながる建築でも同じと考えます。衣服が人間の肌を覆うように、建築も人間の体を覆うシェルターです。人間の領域とその周囲の世界を拡大してみれば、あらゆるものが建築となりうるように思います。荒唐無稽なものでも、ある部分においてとてつもなく機能を発揮できるかもしれません。そこから得られるものは間違いなく可能性を鋭く深くできます。

今まで私は、一般的な概念規定の建築のみに縛られていました。ポロポロでツギハギされた住宅、トラックの荷台に家があるモバイルハウス、自然の中で暮らす生活空間などで暮らしている人の生活は豊かであるのかもしれませんが。学生であるうちに柔軟な思考で向き合ってみたいと思います。

次世代のタマゴたち



分人たちのいるところ

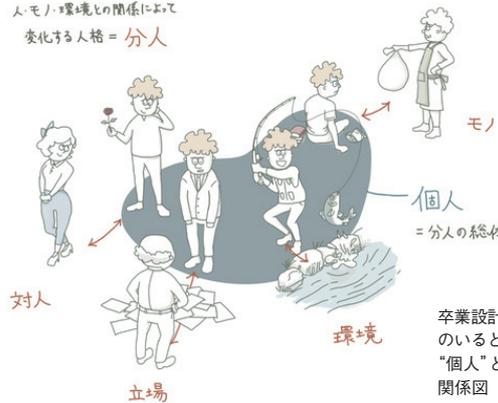
学生の会 @joint 服部 和
芝浦工業大学大学院理工学研究科建築学専攻 1年

“多様性を尊重する時代”に生き辛さを感じる場合があります。多様な考えが認知されると同時に、多くの対立が起こっていることも事実です。社会の中の価値観が多様化する一方で、“個人”の捉え方は画一化してしまっただと感じます。“マイノリティ”というレッテルでしか見られなかったり、他者に踏み込まなくなった社会では、果たして真に多様性を尊重できているのでしょうか。

私は、社会の多様性を考える時、個人の中の多様性を考えることが重要だと考えます。作家の平野啓一郎は、対人関係や環境に応じて分化する人格を“分人”とし、その集合体として“個人”を捉え直しました。対立するコミュニティを、より大きな1つの価値観で統合するのではなく、双方に参加する人々の小さな結びつきによってリンクできないでしょうか。

このような思いから、私は卒業設計で、“多様な自分”を生きることができるような学校建築のあり方について考えました。過渡期にある義務教育の中で、これまでの分人が

人・モノ・環境との関係によって
変化する人格 = 分人



卒業設計「分人たちのいるところ」より、「個人」と「分人」の関係図



卒業設計「分人たちのいるところ」より、1・2年生教室と生活科室前の広場の風景

発生する余地のない画一的な学校建築は見直されつつあります。クラスなど従来大きな割合を占めていた強制力の強い分人を小さくし、弱い分人が入る隙を増やすことで、異なるものたちが異なったままに共存する空間を模索しました。異なるコミュニティの双方に同時に参加するオブジェクトによって、両者を隔てつつ繋げられた学校の小さなリンクが、まちなにも広がっていくことを期待しています。

透明水彩画を描く



モルタルアパート

近所の散歩。ふと見上げたのは古びた木造アパート。蔦の這うモルタルの外壁、錆びた鉄骨外部階段。ざらっとした手触りが蘇った。学生の頃の根拠のない自信と漠然とした不安。まだ何者でも無い頃、こんな所に住んでいたような。クーラーもなくて暑かったな。先輩から回ってきたテレビは、青色の発色が弱くいつも夕暮れのような感じ。いろんな気持ちが溢れてきて、絵にしようと思った。

天気具合、陽射しの角度を選ぶため、何度か通って構図を決めて写真を撮る。見上げなので、あおりはデッサンで修正し、余計なものは省く、電柱やテレビアンテナは省かない、絵に必要。アルミ製のフェンスは板塀に差し替えた。パソコンのフォトショップで写真を合成して具合を確認する。水張りした水彩紙にデッサンをする。記憶の奥を覗き込むような絵にしたいので、空の色の緑を強くしてみる。これもパソコン上で試してみる。

透明水彩の絵の具には白が無い。用紙の地の色が一番明るい色になる。だからどこを白く残すのか、最初に決めなければならぬ。細かい部分は、絵の具がのらないないように、マスキングインクやテープであらかじめ画面を覆っておく。もっと細かい部分は最後にナイフで削る。不透明の白色絵の具を後から置くと、途端に全体の透明感が失われる、不思議だ。水彩用紙に水を落として、パレットで混色した絵の具を流し込む。画面を傾けた方向にグラデーションが生まれる。乾かないうちにさらに絵の具を流す。乾燥させてから筆で絵の具をこすれば、かすれた表現になる。完全に乾くの待ってマスキングを剥がすと画面に光が生まれる。

次に何をすべきか、どこで終わりにするのか、迷いながら描き進める。全体のバランスを見て描き進めると、突然完成する。と言うよりこれ以上描けなくなる。まあ、つまりここで完成。

(武井貴志)

編集を終えて&この冬の楽しみ

- 軍艦島を舞台にしたドラマを毎週楽しみに見えています。いつか端島の観光に行ってみたいです。(佐久間)
- この年の瀬、早く仕事を片付けて年末に一息つく。この瞬間をずっと夢見ています。どこか遠くに行きたいです！(関本)
- 想定外に暖かい秋(?)冬の味覚はまだ遠い、脂ののったぶりしゃぶと熱燗が待ち遠しい。(知見)
- ここ数年、体を動かすことが少なくなり鈍り過ぎているので、運動と健康管理を頑張ろうと思う、しかしお酒はやめられないなあ。(望月)
- 久々の渡欧。本場ドイツのクリスマスマーケットに参加してきます！(小倉)
- 初めての特集担当。「商業建築と建築家」という特集に快く執筆を受けていただいた大野さん、山崎さん、永山さんに感謝。(小山)

編集後記

- 担当した方の原稿を読み、意外な接点を見つけたりすると、なにげなく親近感がわいてきます。(大塚)
- 2025年、年男。ついに(ようやく?)還暦を迎えます。(渡辺)
- 秋から広報委員会に参加しています。「温故知新」を読むと、執筆者の建築設計界へ進んだきっかけに共感します。(杉本)
- 私の誕生日に寝たきりの母が静岡から横浜にフグを食べに行けるようにリハビリ中。家族で連れて行くのが冬の目標。(中澤)
- 常任幹事会報告にもありますように、役員会等対面で行われ、会員の皆様がJIAに期待する空気をよりリアルに感じています。(永峰)
- 今年の冬の楽しみは別府大会と温泉三昧。ちょっと高千穂峡まで足を延ばして雄大な自然と神話の世界に浸りたい。(田口)
- 地元の地酒をお薦めいただきます。嗜む程度に!?(竹内)

あとがき

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
 関東甲信越支部 広報委員会
 委員長 : 田口知子
 副委員長 : 関本竜太
 委員 : 望月厚司・竹内祐一・佐久間達也・大塚浩子・磯野智由・小倉直幸・小山光・永峰麻衣子・渡辺猛・杉本憲治
 編集長 : 関本竜太
 副編集長 : 佐久間達也・小倉直幸
 編集ワーキングメンバー : 広報委員+市村宏文・中澤克秀・会田友朗・野村月咲・伊藤綾香・知見徹摩・立石博巳
 編集・制作 : 南風舎

Bulletin 302 2025 冬号
 発行日 : 令和6年12月15日
 発行人 : 大西摩弥
 発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館
 Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
 印刷 : 株式会社 ココロボ

■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
 ・(公社) 日本建築家協会 (JIA) <https://www.jia.or.jp/>
 ・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2024

露出型弾性固定柱脚工法

ISベース

(財)日本建築センター評定



ヤマエグループ

株式会社 鹿島技研

関東地区 ISベース販売・施工代理店

[鹿島技研HP](#)

[ISベースメーカーHP](#)



未来を築くには
まず足元から



<https://corp-totec.jp/>

土木・建築構造物を支える 杭・地盤改良

確かな施工で安心・安全な土台づくりをお約束致します。

【東京営業所】

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里 5-23-8 KSビル 3F
TEL 03-5604-5806 FAX 03-5604-5816

【本社】

〒950-0813 新潟県新潟市東区大形本町 6-19-21
TEL 025-270-7320 FAX 025-270-7321